

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第 72 号

木津川河床遺跡の地震痕跡 -----	森下 衛・上田 真一郎 --	1
市田齊当坊遺跡の発掘調査 -----	竹原 一彦 --	9
八木町池上遺跡の発掘調査 -----	中川 和哉 --	15
平成10年度京都府内遺跡の発掘調査 -----	辻本 和美 --	19
平成10年度発掘調査略報 -----		27
26. 平安京跡二条大路	29. 芝山遺跡	
27. 長岡宮跡第372次(7ANBND-2)	30. 木津城山遺跡第2次	
28. 算用田遺跡		
府内遺跡紹介 84. 保津山古墳—失われた遺跡を復原する— -----		34
長岡京跡調査だより・69 -----		36
堤 圭三郎理事を偲ぶ-----	杉原 和雄・安藤 信策--	38
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧 -----		40
センターの動向 -----		41
受贈図書一覧 -----		43

1999年6月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)トレンチ部東壁断面の噴砂および曲隆（南西から）



(2)拡張区東壁断面の噴砂および曲隆（南西から）

# 木津川河床遺跡の地震痕跡

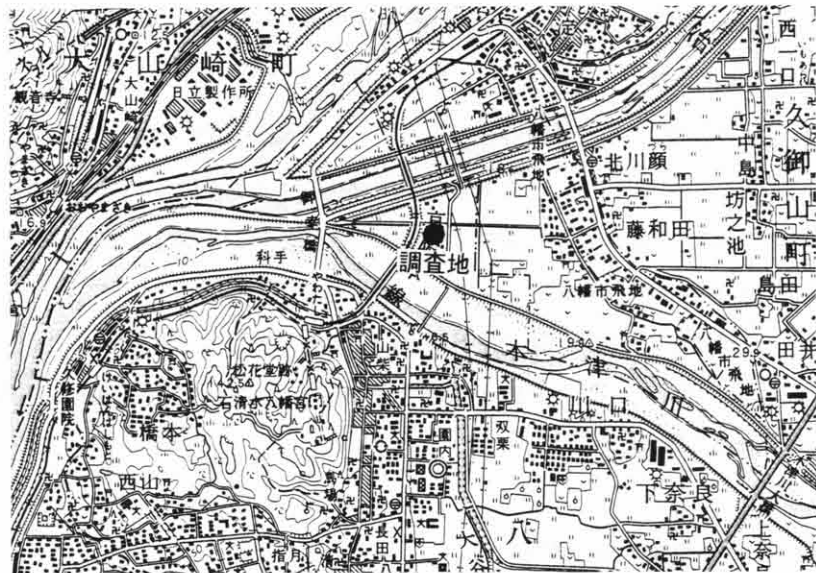
森下 衛・上田 真一郎

## 1. はじめに

京都府八幡市に所在する木津川河床遺跡は、京都府内でも有数の大規模かつ長期にわたる複合集落遺跡である。同遺跡の発掘調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター並びに八幡市教育委員会によって実施されてきた。これらの調査成果は、逐次、概要報告書として刊行されているが、主には、弥生時代後期末葉から古墳時代初頭・古墳時代後期から飛鳥時代初頭といった時期の集落跡が確認されているというものである。ただ、本遺跡を別の意味で著名としているのは、こうした調査成果だけではない。実は、地震の痕跡が明瞭に観察できるといった面で、近年提唱された地震考古学<sup>(注1)</sup>の分野から特に注目されている遺跡なのである。

当調査研究センターでは、平成10年11月から同11年1月にわたり、本遺跡の一面において発掘調査を実施した。調査成果としては、3面の遺構面を確認し、中世後半(15~17世紀)・中世前半(13~14世紀)・古墳時代前期の各時期の遺構を検出したが、さらにそこでは、上記の大地震による噴砂や曲隆現象と呼ばれる液状化した砂層が様々な状況で動いた痕跡を良好な状態で確認することとなった。調査期間中には地震考古学に詳しい通商産業省主任研究官である寒川 旭氏に調査指導を願い、快くこれに応じられた氏からは多大な指導をいただいた。本調査の成果は、すでに調査概要報告として刊行しているが、そこでは紙面の都合もあり、氏から教示頂いた多くの点が不十分なまま積み残されたという状態であった。このため、ここでは表題のとおり、調査で検出した地震痕跡に限って報

告することにした。なお、記述内容の多くは寒川氏の御教示によるところが大きいが、こうした現象に関する知識の乏しい著者らにおいては記述上の間違いも多くあると思われる。これに関しては、すべて筆者の理解不足の責任であることをあらかじめご容赦願いたい。



第1図 調査地位置図(1/50,000)

## 2. 調査の概要

本題に移る前にここでは、今回の発掘調査の概略を簡単に報告しておくことにする。

調査は、これまでも当調査研究センターが発掘調査を行ってきた京都府洛南浄化センター内において実施したものである。ただ、従前の調査によって弥生時代後期末～古墳時代初頭・古墳時代後期～飛鳥時代といった時期の集落跡が確認されている部位からは、北東方向に約200m離れており、調査着手段階では、遺構・遺物の分布は比較的希薄と考えられていた。

ところが、調査の結果は、中世後半(15世紀以降)・中世前半(13～14世紀)・古墳時代前期といった時期の3面の遺構面を確認することとなった。中世に属す2面の遺構面では、主に耕作地の痕跡(鳥畠や水田跡など)を確認したにすぎなかったが、古墳時代前期の第3遺構面では、調査区の西半部で竪穴式住居跡2基を検出した。ここで検出した竪穴式住居跡は、先述のこれまでに確認されていた集落跡と一体のものではなく、調査区内の土層の堆積状況や検出遺構の分布状況などからみて、一旦、沼状地形によってこれらとは隔てられた別の集落跡と理解され、集落跡は、当該地から西方へ広がりをもつものと考えられた。

そして、これらの調査過程の各遺構面調査時に、噴砂や曲隆といった大規模地震の痕跡を調査区内の各所で確認し、しかもその現象が各面の遺構に少なからず影響を与えていた。

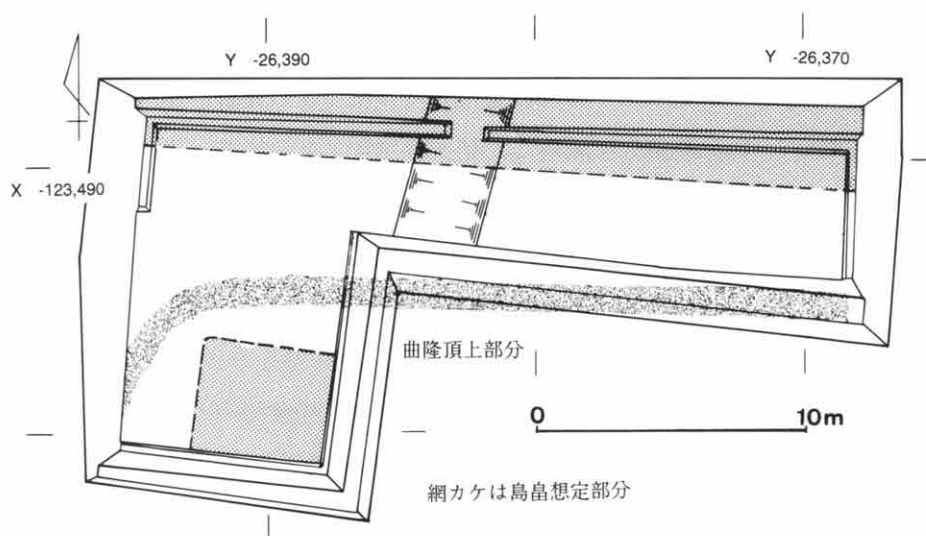
## 3. 検出した地震痕跡

寒川氏の解説によると、「液状化現象」は、ある程度の深さに堆積している砂層が地下水で満たされている状態で起こる。すなわち、通常は砂粒と地下水が互いに支え合って安定しているのだが、地震動によってそれぞれの粒子が安定するために隙間を小さくしようと移動する。それにより、砂粒間を満たしていた地下水が圧迫されて水圧が急上昇する。やがて、水圧の高まった水が砂粒や周囲からの圧力を支えるようになり、地層全体が液体の性質をもつようになる。これを「液状化現象」と呼ぶ。また、この液状化をおこした砂層が上位の地層を引き裂きながら上昇する現象を「噴砂」と呼び、噴出できずにカマボコ様の盛り上がり形成したものを「曲隆現象(その盛り上がりは上位の地層をも盛り上げる)」と呼ぶ。

今回の調査では、噴砂のみならず、主に土層断面の観察によるものの、この曲隆現象が良好に確認され、しかも、この現象が平面に及ぼした影響をも顕著に検出することとなった。中世前半期と判断している第2遺構面上において、畝溝と思われる素掘り溝群を検出したが、そのうち南北方向のものが、曲隆の頂上方向へ持ち上げられる形になっていた。すなわち、溝底のレベルが、隆起ラインに沿うように約20cm持ち上がっていたのである。また、この現象は、下層の第3遺構面においても同様で、曲隆の縁辺に南隅のかかる竪穴式住居跡(SH01)において、おなじような盛り上がりを確認したのである。ここでは、こうした調査で確認した地震痕跡を紹介することとしたい。

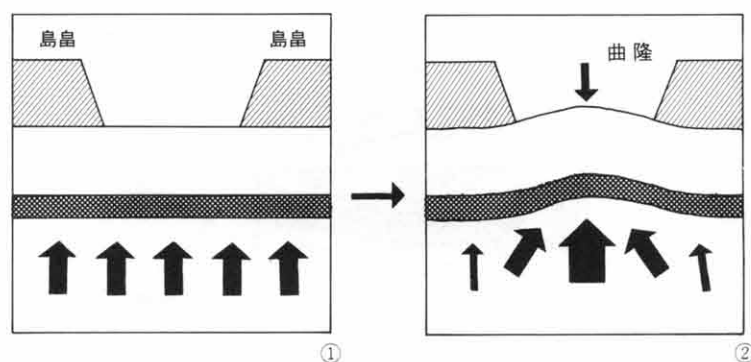
### (1) 曲隆現象の発生範囲

今回の調査区内で、平面的に確認された曲隆現象の範囲は、L字状に設けたトレンチの南西隅



第2図 調査区内における曲隆頂上ライン

付近から一旦北東方向へのびたものが緩やかに屈曲し、その後は東西方向にのびるといったものであった(第2図)。こうした曲隆現象の認められる方向性は、旧地形に沿うという考えや、周辺を流れる河川に沿うという考え方などがある。しかし本調査区の旧地形は東が低く西が高いといったものであり、これに一致し



- ① 上位の地層に対して等しく圧力がかかる
- ② より小さな力で押し上げ可能な箇所へ圧力が集中し、隆起する

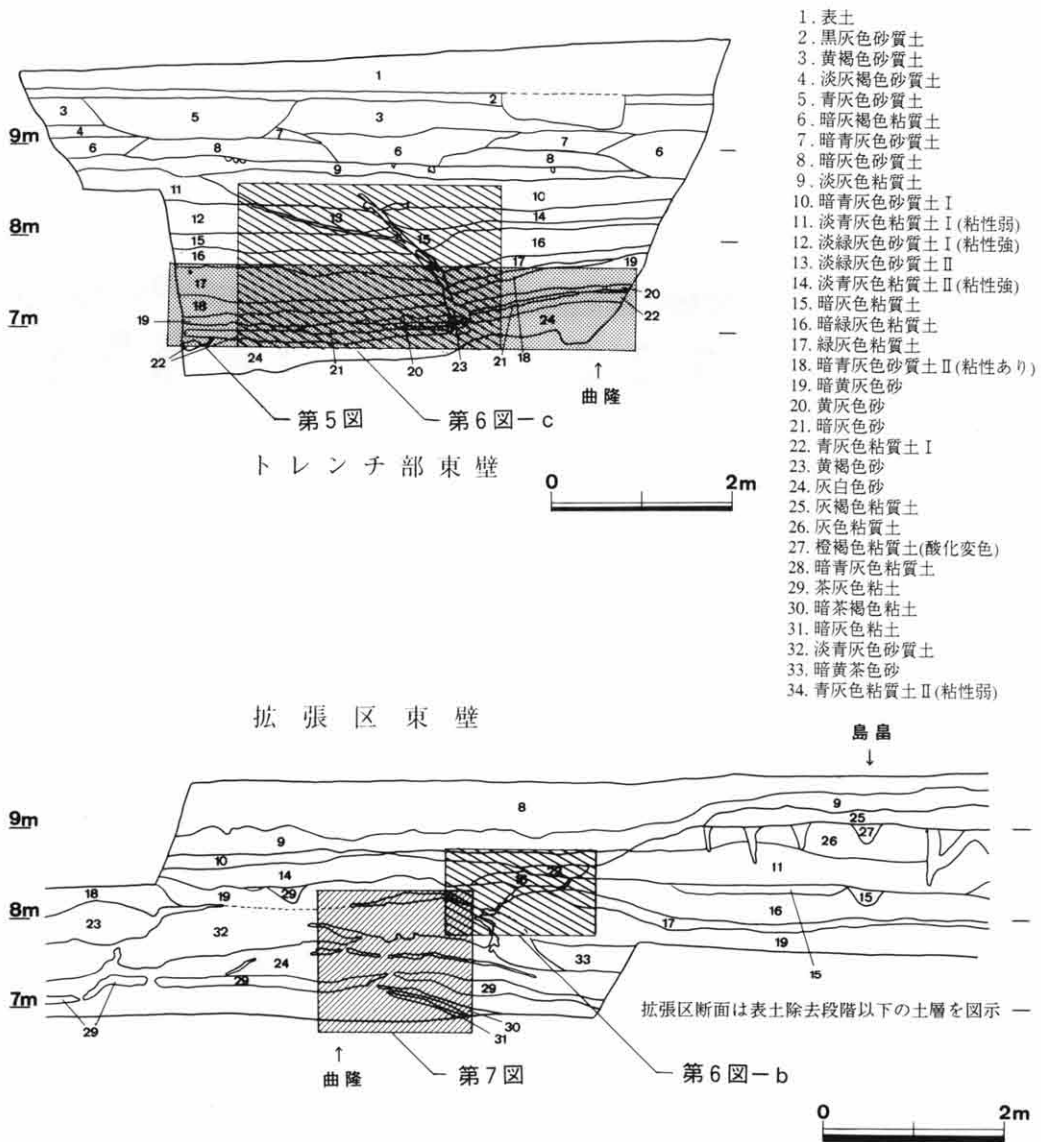
第3図 曲隆現象における圧力集中概念図

ない。また、周囲を流れる木津川の流路もこれに明瞭に一致するとは言いがたい状況である。しかし、調査区内の土層断面および各期の遺構の平面的な把握をある程度行った時、一つの推論に達した。つまり、曲隆現象の前段階としての液状化をおこした砂層が等しく上位の地層を押し上げようとした時、上位の地層の堆積具合によって曲隆現象が生じる箇所が限定されてくるのではないかということである。地震が起こったときの調査区内の状況を見ると、調査区北辺及び拡張部分の南東隅部には島島が存在し、それ以外の部位は一段低い水田であったと判断された。これと曲隆現象の発生地点を重ね合わせると、明らかに曲隆は島島下の水田部分においておこっていることが分かる。すなわち、曲隆現象が生じるとき、上位の地層上に盛り土や何らかの構築物が存在すると、これを避け、より小さな力で押し上げることのできる方へ圧力が集中するといえるのではないだろうか。

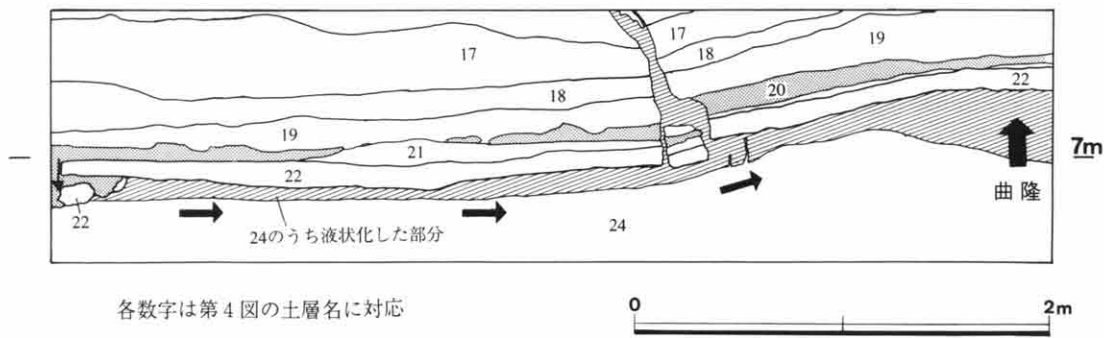
(2)東壁断面(第4・5図)

一方、トレンチ部東壁断面においては、その曲隆の盛り上がり部周辺における様々な現象が良好に観察できた。それは、(A)盛り上がり部縁辺における粘土層の分断、(B)さらにこの分断部分から噴出している噴砂、(C)分断部分で破断した粘土層ブロックの状況、(D)分断部位を境とした断層状の土層の食い違い、(E)粘土層下の液状化した砂層の動き、などである。

曲隆現象を引き起こすのは言うまでもなく液状化した砂層である。そして、その液状化した砂層の直上には、通常、蓋の役割をした粘土層(第22層)が存在する。第5図中에서도明らかなように、トレンチ部東壁断面においては、この第22層が、北端部と中央付近の2か所でブロック状の塊となって分断している状況が良好に観察された(A)。中央付近の分断か所では、そこからさらに上位の土層を引き裂いて噴出した噴砂の状況が明瞭に観察されるとともに(B)、噴砂の噴出部を境にその南側が曲隆現象によって隆起したため、分断か所の根元部分では、断層状に土層の食い違



第4図 調査区土層断面図



第5図 トレンチ部東壁断面の曲隆に伴う液状化層の流動

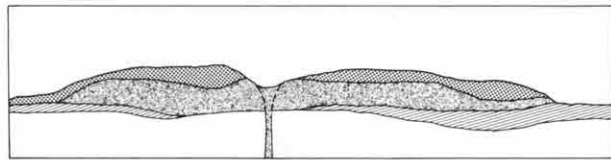
う様子が明瞭に見てとれた(D)。

また、両方の分断部分では、ブロック状に取り残された粘土塊が液状化した砂層内に沈降している状況も認められた(C)。特に、それは北端部で顕著に認められた。液状化をおこした砂層を仔細に観察すると、実際に液状化して流動した範囲を判別することができる(第5図斜線部)。今回のそれは砂層上端から5~10cm程度の範囲と判断された。北端部の粘土塊はこの液状化した範囲にちょうど収まるように沈降し、分断か所から南方へ約20cm移動した位置にあった(第5図左端下方矢印部)。さらに、この粘土塊を挟んで北側(本来、粘土塊が存在した場所)には粘土層上に堆積している黄褐色砂が充満していた。こうした現象は、この粘土塊が、分断された後、液状化した砂層の動きにつられて南側へ移動したこと、さらに粘土塊の移動に伴い、噴砂を生じた中央の分断部とは逆に、ここでは上層の黄灰色砂層が吸い込まれたことを示している。通常、砂層の液状化と上位の土層の分断は噴砂(すなわち砂の噴出)に結びつくものととらえられる。こうしたなか、ここには、これに逆行する現象が認められたのである(E)。液状化した砂層の動きは、この南側に認められる曲隆現象に大きな影響を受けたものと考えられる。曲隆現象による隆起部分では、液状化した砂層が厚く認められた。すなわち、液状化した砂層は曲隆現象が生じつつある箇所へ向かって流動したのであろう。そして、曲隆部に近いところでは上方へ動く圧力によって噴砂が生じ、離れたところでは逆に液状化した砂層中へ上方から砂層を吸い込むような現象が生じたと考えざるをえないのである。

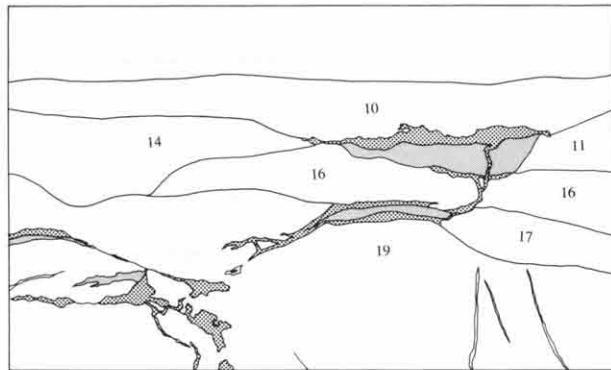
### (3) 噴砂について

今回の調査では、平面的にも、また各土層断面においても数多くの噴砂を確認した。なかでも、トレンチ部東壁および拡張区東壁断面においては、これが良好な状態で観察された。両断面における噴砂を詳細に観察すると、同噴砂内に粒子の異なる複数種の砂が認められる(粒子の大きさの目安は、第6図中に示している)。ここでは、こうした粒子の異なる砂の状況についても幾つかの貴重な観察を行うことができた。

まず、噴出した噴砂が良好に遺存していた拡張区断面によれば、極細粒砂上に細粒砂が噴出している状況を認めた(この噴砂は、島島北辺部の溝状の窪み部分に吹き出したものである)。寒川氏によれば、「本来は、細粒砂の上にさらに極細粒砂が再度噴出していたが、流失したのだろう」



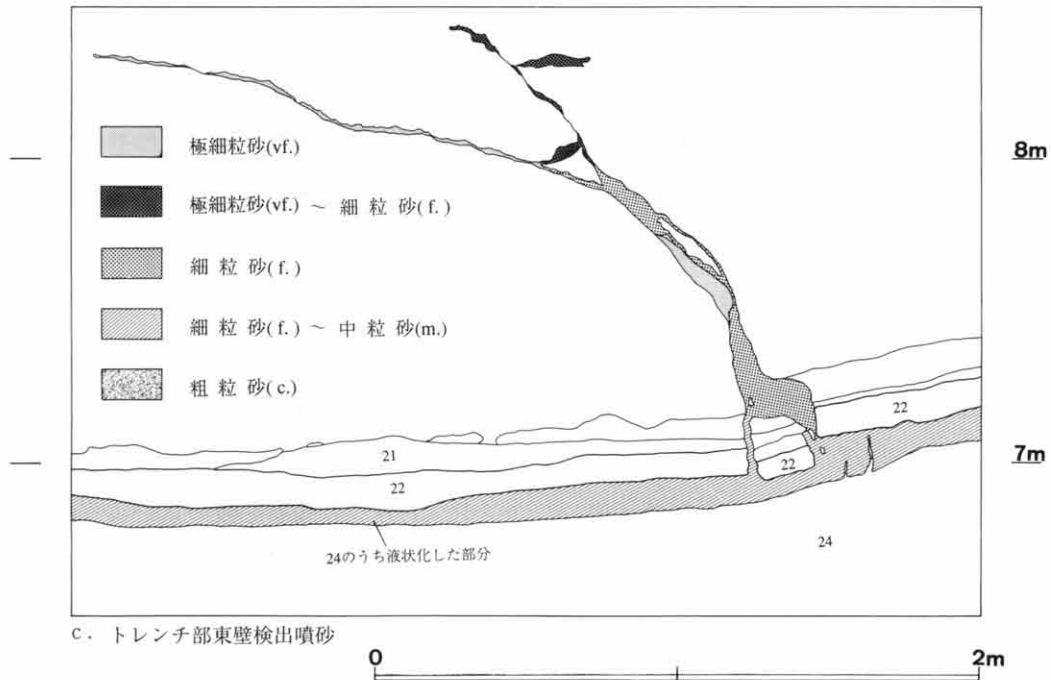
a. 兵庫県南部地震で西宮浜に生じた噴砂



網カケ部は液状化して移動した砂層  
(網の差異は粒子の大きさを表わす)

レキ	2 mm ~
粗粒砂(c.)	0.5 ~ 2 mm
中粒砂(m.)	0.25 ~ 0.5 mm
細粒砂(f.)	0.125 ~ 0.25 mm
極細粒砂(vf.)	0.063 ~ 0.125 mm
シルト	~0.063 mm

b. 拡張区東壁検出噴砂



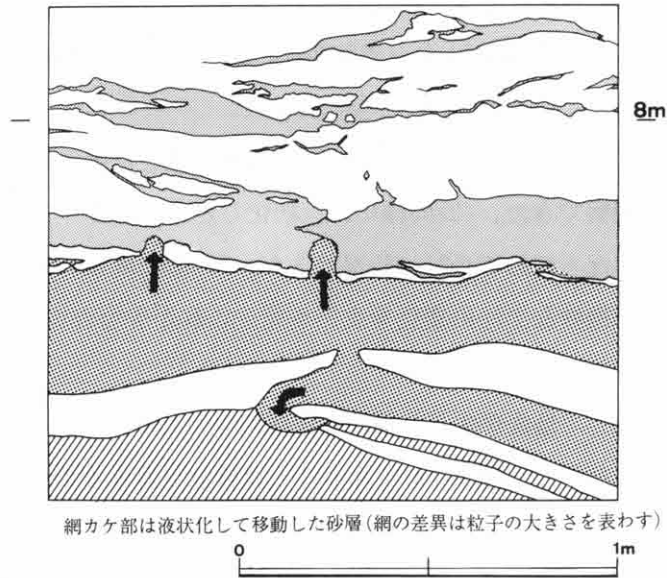
c. トレンチ部東壁検出噴砂

第6図 噴砂内砂粒子分布図

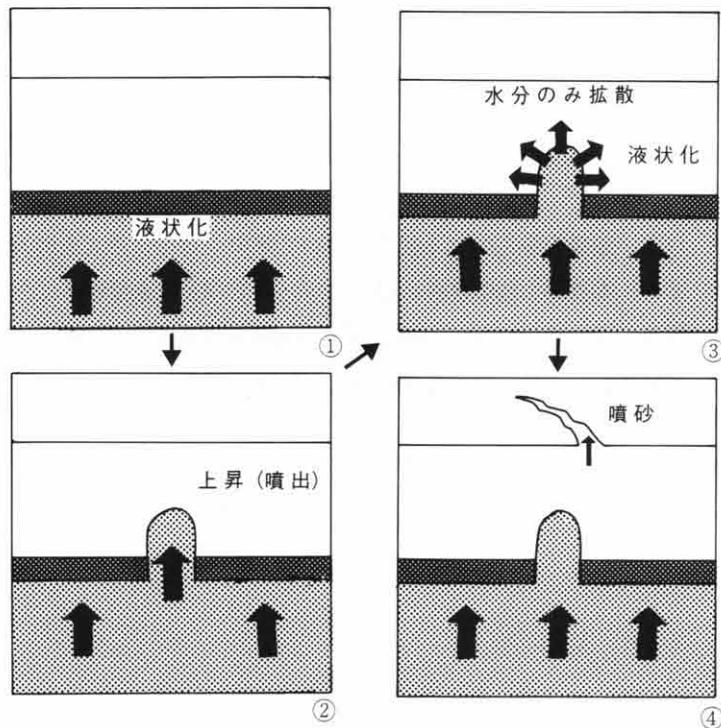
とのことであった。これは阪神淡路大震災による噴砂にも共通した現象で、その理由(細かなメカニズム)は不明な点が多いものの、一回の噴出過程の中で、まず細かな粒の砂の動きによって噴出のルートが造られ、その後、そのルートを通して若干粗い粒の砂が噴出、さらに圧力が弱まった時点で再び細かな粒の砂の噴出へと変わるといった状況が想定されるようである。噴砂を引き起こす程度の大地震であれば、その揺れは1分程度は続き、実際には噴砂はその後10分程度は起こりうるらしい。こうした時間の経過のなかで、噴出する砂の粒子は微妙に変化したようである。



一方、基本的に、噴砂によって噴出する砂の粒子の大きさは、噴砂の先へいくほど細かくなると考えられる(分級作用)。これは、粗い砂ほど水の動きについてこれないと判断されるからである。拡張区東壁の曲隆部中央付近では、こうした砂の粒子の差異による砂層の動きの違いも明瞭に観察できた(第7図)。ここでは、灰白色中粒砂が上位の粘土層を破り上方へ突出していたが、これが噴砂の本体になるのではなく、コブ状の突出(高さは約10cm程度)にすぎない。明らかに上方への噴出(流出)が生じたものと判断されるが、粒子の粗さゆえにこれ以上は上昇することができず、置き去りにされた痕跡と考えられた。そして、水分だけがさらに上層へあがり、その水分によってさらに上方の粒の細かな砂層が液状化し、噴砂として上昇あるいは横方向へ移動した現象が読みとれるのである(第8図)。



第7図 砂層残留噴砂



- ① 地震動により圧力が上昇、液状化が起こる
- ② 上位の粘土層を分断、砂層が上層へと噴出
- ③ 水分のみが拡散、周囲に液状化が起こる
- ④ その上面において噴砂が発生

第8図 砂層内残留噴砂発生メカニズム

#### 4. まとめ

以上、今回の調査において確認した地震痕跡である。

内容的には新事実を提示したわけではなく、これまでも報告されていた状況がより良好な状況で確認された点を報告したにすぎない。

確認された地震痕跡は、無数の噴砂と調査区を南西から北東円弧を描きながらのびる曲隆であった。うち、調査区内(トレンチ部並びに拡張区)の東壁断面で認めたそれぞれの状況は、過去の調査で類を見ない良好な状況を呈していた。

具体的には、噴砂・曲隆において、(1)液状化した砂層が移動・噴出した際の砂粒の動きが非常に良く観察できた、(2)同様に、液状化した砂層によって上方へ隆起ないし破断された上部の粘土層の状況も極めて良好に観察できた、(3)曲隆現象の範囲・方向について、当時の地表にあった島畠が微妙な土圧の変化を生じさせ、これが少なからず影響を及ぼしたことが確認された、というものであった。

痕跡を残した地震が生じた細かな時期については、当地の土地利用の変遷を考えた場合、島畠が形成された後(15世紀以降)であることは確認されるものの、これ以上は明らかにできなかった。従来からいわれるように、慶長の大地震が第1の候補としてあげられる点は変わらないといえる。

最後に、今回の調査では、こうした地震痕跡が調査を行った遺構面に対して非常に大きな影響を与えていること、またこのような大規模な地震にみまわれ居住地や耕作地が荒廃しながらもこれを復興してきた祖先の力強さを痛感した。本報告文が、今後の地震考古学研究の一助になれば幸いである。

(もりした・まもる＝調査第1課資料係調査員)

(うえだ・しんいちろう＝山城町教育委員会文化財嘱託員)

注1 以下、地震痕跡に関する記述について寒川 旭氏に多大な御教示を受けた。記して感謝いたします。  
また、本遺跡の地震痕跡に関しては、以下の文献を参考とした。  
岩松 保・寒川 旭「八幡市木津川河床遺跡検出の大地震に伴う噴砂について」(『京都府埋蔵文化財情報』第26号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

# いちださいとうぼう 市田齊当坊遺跡の発掘調査

竹原 一彦

## 1. はじめに

市田齊当坊遺跡は、久世郡久御山町大字市田小字齊当坊・新珠城に所在する集落遺跡である。

今回の発掘調査は、建設省と日本道路公団が計画する国道1号京都南道路(第二京阪自動車道路)建設に伴う事前発掘調査であり、建設省の依頼を受けて平成10年9月21日～平成11年3月12日の期間で発掘調査を実施した。

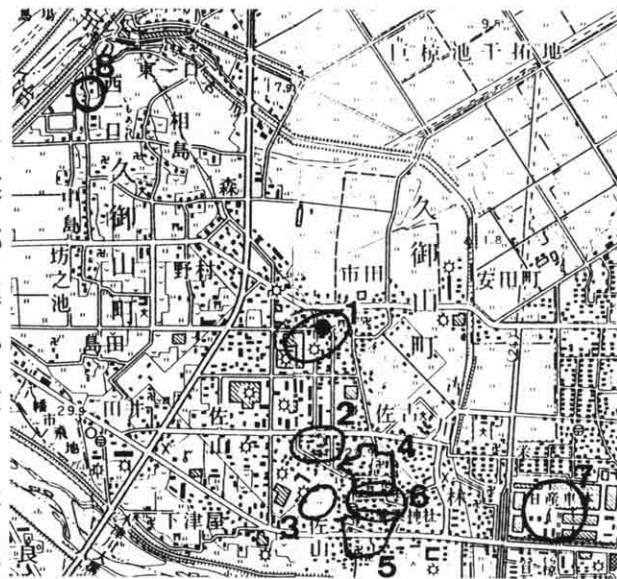
遺跡の所在する久御山町は沖積平野(山城盆地)の中央部にあり、桂川・宇治川・木津川合流部の東側に位置する。町域内の北部には、昭和初期頃まで巨椋池と呼ばれた大池が存在したが、現在は干拓によって肥沃な農耕地へと変貌し、その姿をとどめていない。市田齊当坊遺跡は、この巨椋池南岸に存在した、自然堤防の微高地上に立地している。

久御山町では現在のところ、埋蔵文化財等の遺跡としてわずかに6遺跡が周知されている。今回、京都南道路建設に伴う事前の試掘調査の結果、路線帯内で周知遺跡の佐山遺跡(集落跡)の広がりを確認すると共に、市田齊当坊遺跡・佐山尼垣外遺跡の2遺跡の存在を新たに確認した。市田齊当坊遺跡は新発見と共に、町内で初めての本格的な遺跡発掘調査となった。

## 2. 調査の概要

今回の調査地は大内川と道路によって3か所に分断されたことから、北から順にA・B・Cの地区名を付けて発掘調査を実施した。大内川は昭和初期に存在した京都飛行場に伴う排水路であり、遺跡との関連は認められない。調査の結果、各調査地から平安～鎌倉時代と弥生時代(中期)～古墳時代の2時期の遺構面を検出した。

上層の中世面では、久世郡条里に伴う坪境溝・里道を検出した。また、下層の弥生時代中期を中心とする遺構面では、多数の竪穴式住居跡・方形周溝墓・溝を検出すると共に、古墳の周溝を同時に検出した。特



第1図 市田齊当坊遺跡および周辺遺跡(1/50,000)

- |                 |           |
|-----------------|-----------|
| 1. 市田齊当坊遺跡(調査地) | 2. 佐山遺跡   |
| 3. 佐山尼垣内遺跡      | 4. 佐古環濠集落 |
| 5. 佐山環濠集落       |           |
| 6. 散布地          | 7. 林寺跡    |
|                 | 8. 西一口城跡  |

に遺構・遺物の豊富な弥生時代中期遺構面と遺物包含層は、海拔8.5～9.0m(現地表下約3m付近)に位置している。

(1)検出遺構

①A地区

調査対象地を南東から北西方向に流れる大内川の北側に設けた試掘トレンチであり、中世の条里溝・弥生時代中期の溝と土坑などを検出した。狭小な調査地であることから遺構の性格は不明な点が多いが、弥生時代の溝は多数の溝が切り合い関係にある。これらの溝に伴う土器は、弥生時代中期の畿内第Ⅱ・Ⅲ様式が中心をなしている。

②B地区

B地区は大内川の南に位置する調査区である。中世(12～15世紀)と弥生時代中期の遺構・遺物を検出した。弥生時代においては、遺構の内容・密度等から、集落の中心部と判断される。

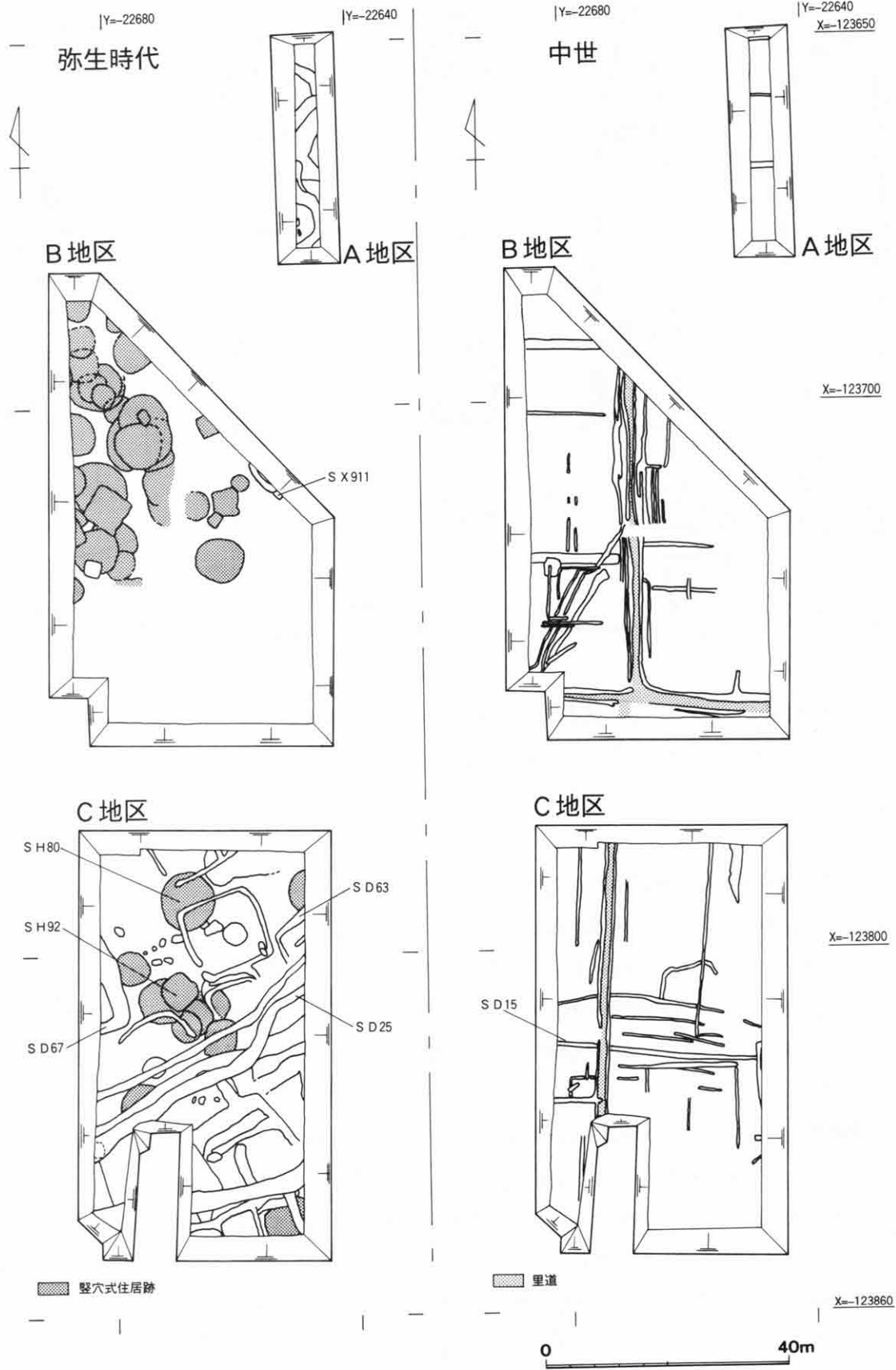
**中世** 中世の遺構には、井戸・溝がある。溝群は主として、調査地のほぼ中央に南北方向に掘削されているものと、調査地の南部で東西に掘削されているものがある。南北に掘削されている溝群は、中央に若干のスペースを保って、東群と西群に分かれ、それぞれの溝群は数多くの溝が切り合っている。この溝群とその間の南北に連なるスペースは、現地表にみられる条里型地割りの里道と合致することから、古い時代の里道と判断する。一方、調査地の南端部で検出した東西溝は、現地表での条里型地割りは判然としないが先述の南北里道と直交することから、東西方向の里道と考えられる。南北方向の里道は、東西溝との交差点部において直交せず、交差点以南の里道は西に約2.2mずれる状況にある。里道に伴う溝の心々間は、南北里道が1.2～1.6m、東西里道で約2.2mを測り、東西里道が幅広となる。

**弥生時代** B地区では総数40基以上の竪穴式住居跡を検出した。特に、北半部、その中でも北西部に多くの竪穴式住居跡が集中し、6～8基の竪穴式住居跡がほぼ同じ位置で重複して建て替えられている。

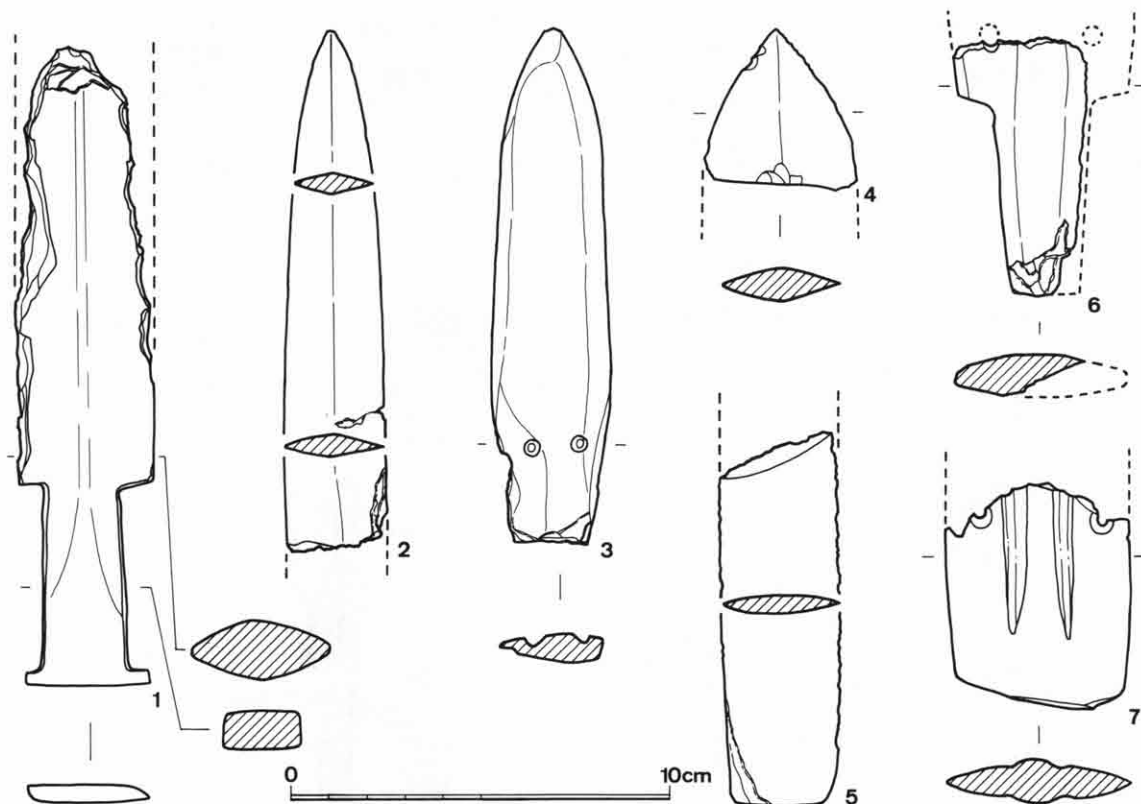
北東部では、直径約2.5mの円形住居、一辺約2mの方形住居といった居住には適さないとと思われる小規模なものが検出された。また、特徴的な事例として、小規模住居跡周辺部では、直径約20cm×深さ約40cm前後の小さな柱穴が無数に点在している。この小柱穴群に近接して、焼土坑(SX911)が存在する。この焼土坑は一部が調査地外に延びることから全容が判明しない。土器焼成跡・金属器製作跡等とも推測されるが、整理・検討が進んでいない現時点では判断を保留したい。

小規模住居跡や小柱穴群は、他の調査例では、同様の柱穴の中から石器の剥片が多数出土したことから、石器製作の作業場の跡と考えられている。このような事例から、当遺跡の小規模住居跡や小柱穴群も、集落内の作業場としての可能性も考えられる。

B地区の南半部では、遺構下に自然堆積した砂層が大規模地震によって液状化し、砂層の盛り上がり・噴砂が広範囲に認められる。その影響のため、竪穴式住居跡や土坑等の多くの遺構は本来の規模・形態・重複関係が失われていた。また、遺構自体の盛り上がりと、その後の削平によ



第2図 遺構平面図



第3図 出土遺物実測図(1)

って遺構が削り去られている。検出できた遺構の分布密度はあまり高くないが、南のC地区での遺構の検出状況と考え合わせると、本来は、数多くの遺構が調査地南半部にも存在していたと考えられる。

### ③C地区

多数の竪穴式住居跡を検出したB地区の南に位置する。この調査区では、平安～中世、古墳時代前・後期、弥生時代中期の遺構を検出した。弥生時代集落では、竪穴式住居跡の分布密度はB地区より薄い。また、方形周溝墓の存在等からも集落の中心部から南に外れた位置にあたる。

**中世** B地区の里道交差部から南に延びる里道と条里溝・柱穴跡を検出した。里道に伴う両側溝の心々間は1.6mを測る。多くの溝は出土した瓦器碗から13世紀代と判断されるが、S D15は、唯一平安時代に遡る。

**古墳時代** 調査地中央の西端部で、方墳と判断する幅約2mの周溝(S D67)を検出した。溝埋土から出土した須恵器高杯から、古墳時代後期の方墳と判断する。古墳の規模については、大半が調査地外となることから不明である。弥生集落の環濠とみる溝群のうち、最も新しいS D25は埋土の最上層に布留式土器が含まれ、古墳時代前期に埋没した状況がうかがえる。

**弥生時代** 中期に属する竪穴式住居跡11基・井戸跡2基・方形周溝墓群のほか、溝・土坑・柱穴跡を検出した。調査地北西部はB地区にみられた地震の液状化が及んでいる。

竪穴式住居跡には円形・隅丸方形の2種があり、直径約5～6m規模のものが多数を占めるが、なかには直径9mの規模を測る大形住居跡S H80も存在する。S H80は液状化の影響で床面が大

きく波打ち、ほとんど平坦面が残らない状況にある。この住居跡の埋土中から有柄式磨製石剣(第3図1)の出土をみている。調査地中央部では6基の竪穴式住居跡が重複関係にある。このうち最も新しい住居跡の一つであるSH92は焼失住居であり、完形品の水差し形土器(第4図8)2点と高杯1点(同10)が、住居内の土坑埋土中から出土している。

方形周溝墓は調査地のほぼ全域に存在し、竪穴式住居跡を切って存在している。方形周溝墓は特に南半部に集中する傾向がみられる。後世の削平で埋葬主体部は消滅し、周溝部のみが検出できた。方形周溝墓に伴うSD63埋土中層では、完形に近い高杯(第4図9)が出土している。

## (2) 出土遺物

今回の発掘調査では、弥生時代中期の土器・石器・石製品が多量に出土している。

土器には壺・甕・高杯・水差し形土器等の器形がみられる。石器では、磨製の石剣・石鏃・石包丁が多数出土している。

磨製石剣(第3図)には銅剣と鉄剣を模倣したものがあり、これまでに破片ながら20点の出土をみている。このうち銅剣型磨製石剣は2点(6・7)を数える。穂摘み具では石庖丁は30点を越える量が出土している。石庖丁のなかには、和歌山県産とみる緑泥片岩製石庖丁が数点ながら存在している。

その他の石器として、狩猟具の石鏃、工具の石斧・砥石・石錐も出土している。石器関連では加工途中の未製品や多量の剥片も出土した。

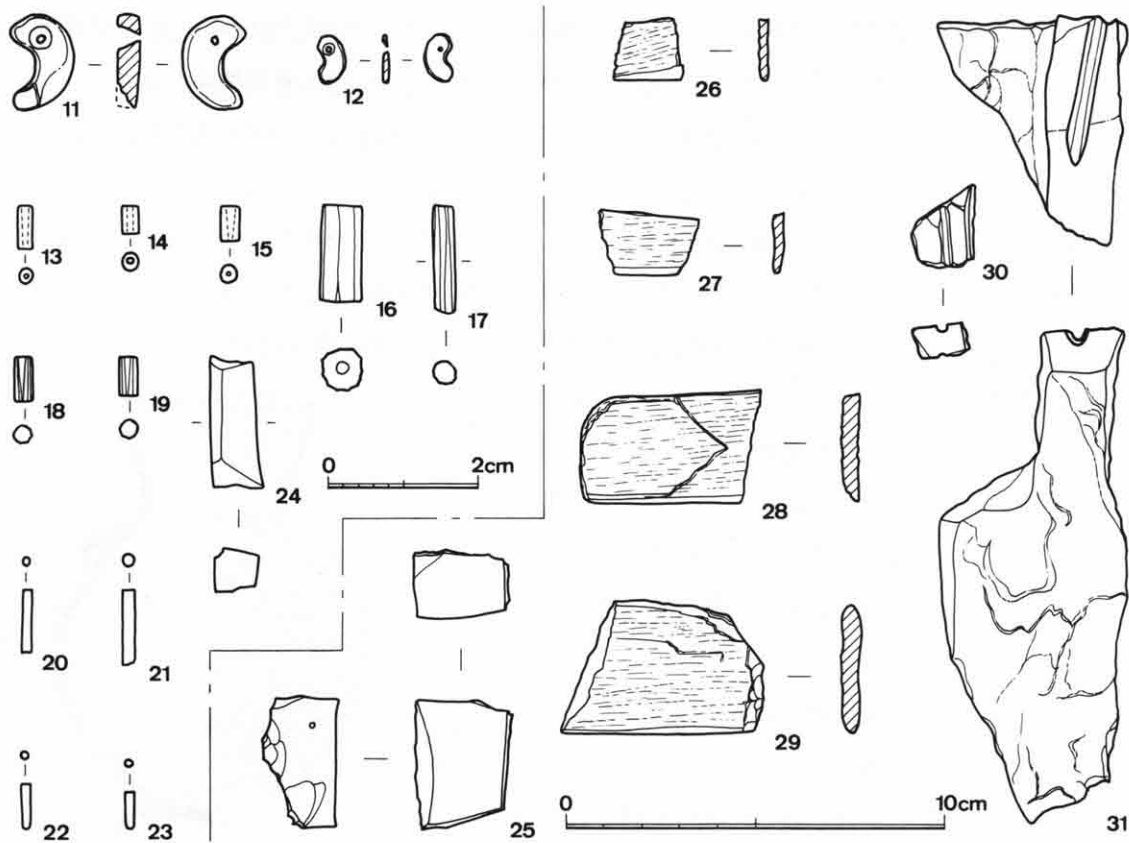
竪穴式住居跡床面付近の埋土を水洗した結果、多数の石器に混じって、玉作りに関連した遺物が製品と共に多数出土した(第5図)。ヒスイ製勾玉(11・12)や碧玉製管玉(13~16)と共に、加工途中の管玉(17~19)・石鋸(26~29)・石針(20~23)・玉砥石(30・32)などの加工具、多量の碧玉剥片が出土している。

## 3. まとめ

今回の発掘調査は久御山町で初めての本格的な発掘調査であり、沖積地に営まれた弥生時代中期の大規模集落跡と、古墳時代後期の方墳を新たに発見する成果を得た。また、当地域に残る久世郡条里の里道交差点部を発掘調査で検出したことは、今後の久世郡条里研



第4図 出土遺物実測図(2)



第5図 出土遺物実測図(3)

究に大きな影響を与える資料となる。

市田齊当坊遺跡は、6,000㎡の調査範囲に約50基の竪穴式住居跡が存在し、多量の遺物が出土している。多量の磨製石剣や石鏃・石包丁、石器作り・玉作りに関する豊富な遺物の内容は、この市田齊当坊遺跡が南山城地域の中でも特に大規模な集落であったことを物語っている。打製石剣・磨製石剣が多量に出土した遺跡は、全国的にみても特に代表的な遺跡に限られる。管見による近隣地域例として神足遺跡(京都府長岡京市)の47点、唐古・鍵遺跡(奈良県)で53点(うち打製50点)、大阪府下の池上・曾根遺跡で42点・東奈良遺跡で22点・安満遺跡で24点が知られるところである。玉作りに関しては、全ての竪穴式住居跡から微細な碧玉剥片の出土があり、特定住居での玉作りといった傾向はこれまでのところ認められない。

市田齊当坊遺跡では、A・C両地区で継続調査を予定している。今後、整理作業の進捗・拡張調査によって、さらなる成果が得られるものと期待される。

(たけはら・かずひこ＝調査第2課調査第3係主任調査員)



# やぎ いけ がみ 八木町池上遺跡の発掘調査

中川 和哉

## 1. はじめに

本調査は、平成10年度主要地方道亀岡園部線関係遺跡埋蔵文化財発掘調査として京都府土木建築部の依頼を受け実施した。調査地は、京都府船井郡八木町池上に所在する。池上遺跡は、平成9年度の八木町教育委員会の試掘調査によって、弥生時代から中世の墓地・集落跡であることが確認された。今回の府道新設工事に伴う発掘調査においても、弥生時代から中世にいたる多くの遺構・遺物を検出することが事前に予測された。

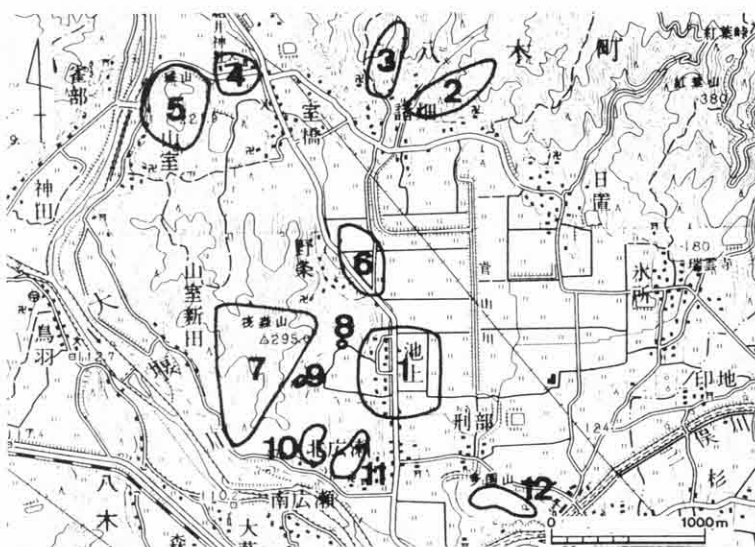
池上遺跡は亀岡盆地の北端に位置し、狭隘部から平坦面に変わる場所にある。また遺跡の東側には、亀岡盆地の北側の入り口を塞ぐように<sup>いかだもり</sup>筏森山(295m)が立地している。

調査対象地は道路部分で、現在の農道や農業用水路のため調査可能な幅が狭く、7つのトレンチに分割した。調査区は北を第1トレンチとし、順に番号を付けた。現地調査は、調査期間は平成10年10月22日～平成11年3月5日、調査面積は約2000m<sup>2</sup>である。

## 2. 調査概要

①第1トレンチ 奈良・平安時代の掘立柱建物(S B114)と弥生時代の溝2条、井戸(S E02)1基、その他各時期の柱穴が多数発見された。弥生時代の溝S D01は断面形が長方形になる溝で、南端で弥生土器が比較的まとまって出土した。耕作土直下が遺構面のため、遺構の多くは残りが悪く、現在の水田面を形成したときに遺構の上半部は大きく削平されていると考えられる。

②第2トレンチ 平安時代の井戸(S E271)1基・3間×5間の南北棟の方形掘形を持つ掘立



第1図 調査地および周辺遺跡分布図

- |            |            |           |          |
|------------|------------|-----------|----------|
| 1. 池上遺跡    | 2. 松本古墳群   | 3. 大谷口古墳群 | 4. 新庄遺跡  |
| 5. 新庄城跡    | 6. 野条遺跡    | 7. 筏森山古墳群 | 8. 八幡宮古墳 |
| 9. 池上院裏古墳  | 10. 南尾西古墳群 | 11. 北広瀬城跡 |          |
| 12. 多国山古墳群 |            |           |          |

柱建物跡(S B115) 1棟・土坑2基(S K270・359)、古墳時代の竪穴式住居跡2基・南北3間×東西3間以上の掘立柱建物1棟、弥生時代の土坑1基が検出できた。その他には「コ」の字状にめぐる溝が2か所検出されたが、遺物もなく時期は不明である。溝が比較的浅く遺構の規模などから竪穴式住居跡の残欠と位置づけられる。

平安時代の井戸跡からは、10世紀末の黒色土器の椀、轆轤整形の土師器椀・皿、手づくねの土師器皿、銅製の鈴等が出土した。埋土の中層付近に大形の石が集中しており、上下で時期が異なる可能性がある。土坑S K270も同時期の遺構で完形の土器が多く出土している。弥生時代の土坑(S K03)からは、磨製石斧や土器とともに玉砥石が出土している。包含層からは紅簾片岩製の石鋸が出土しており、池上遺跡で玉が作られていることが明らかになった。土坑S K170からは大形の壺の口縁部のみが出土した。

③第3トレンチ 古墳時代の2間×4間の総柱の掘立柱建物跡(S B117) 1棟・竪穴式住居跡7基、弥生時代の中期の竪穴式住居跡2基・土坑2基以上、時期不明の総柱建物跡2棟、その他多くの土坑・柱穴が検出されている。

古墳時代後期の竪穴式住居跡S H90は竈の残りが良好で、焚き口の両袖部が、板石によって補強されており、中央には支脚として土師器の甕が据えられていた。弥生時代の竪穴式住居跡からは、土器製作に用いられたと考えられる白色の粘土が多く出土している。また南側のS H118からは砂岩製の砥石が3点出土しており、磨製石器等の製作がおこなわれていたと想定される。

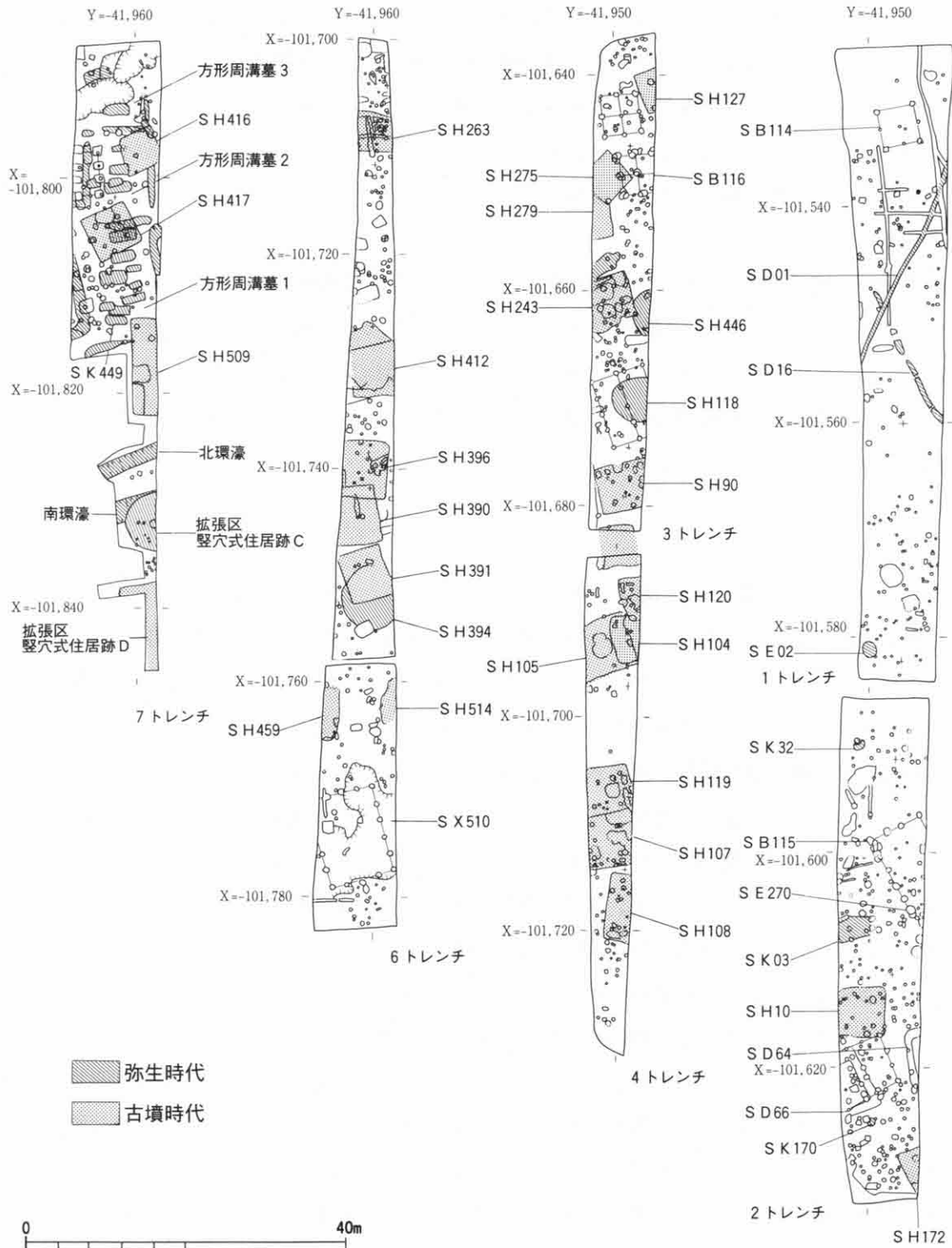
④第4トレンチ 古墳時代の竪穴式住居跡7基、他に土坑、柱穴を検出した。S H108以外の竪穴式住居跡は残存状態が悪く、竈を中心に貼床部の一部しか検出できなかったもの(S H104)などが含まれる。貼床を剥がすと、住居掘形の多くは土坑状の凹凸があり、遺物は住居に伴う時期のものも含まれる。



第2図 調査トレンチ位置図  
(網フセ部は八木町教育委員会調査地)

⑤第5トレンチ 古墳時代の竪穴式住居跡5基、弥生時代の竪穴式住居跡1基、他に土坑・柱穴を検出した。竪穴式住居跡S H391は7世紀代のもので、今回の調査では最も新しい竪穴式住居跡である。

⑥第6トレンチ 古墳時代の掘立柱建物跡1棟、竪穴式住居跡2基、他に土坑、柱穴を検出した。トレンチ中央から南部にかけて大きな土坑状の落ち込み(S X510)は立ち上がりが急角度で人為的なものと考えられる。上面では判別することができなかったが、何度も掘削された結果、このような大形の土坑状の輪郭となったことが分かった。出土遺物には古墳時代後期の須恵器があることから、古墳時代以後に掘削され



第3図 遺構実測図

たと考えられる。

⑦第7トレンチ 奈良・平安時代の掘立柱建物跡1棟、古墳時代の竪穴式住居跡3基、弥生時代の方形周溝墓3基の他に土坑、柱穴を検出した。

掘立柱建物跡は、建物の軸が真北を向く、南北3間×東西1間以上の規模を持ち、掘形には一辺が1mのものも含まる。方形周溝墓には25基以上の埋葬主体部があり、そのうち、4基以上が周溝内埋葬で、その棺上または小口部付近から供献土器が出土している。埋葬主体部S K 449か

らは碧玉製管玉が出土した。主体部それぞれ検出面からの深さが異なるものがあり、切り合い関係のある主体部では新しいものが小形で浅い傾向が認められた。主体部の中には木棺痕跡が確認できるものもあり、長側板で木口板をはさむ形態の棺、また長側板が小口から突出しないものなどがある。大形の主体部が前者、小形のものが後者である傾向があることがわかった。西側の溝中央部からは供献土器と考えられる弥生時代中期の壺・甕・水差し形土器がほぼ完形の状態で出土した。

調査期間の後半に第7トレンチの南側を拡張した結果、古墳時代の竪穴式住居跡1基、弥生時代中期の竪穴式住居跡1基・環濠2条を検出した。また、S H509が9 m弱の大形の竪穴式住居で西辺中央に竈を持ち、西南部に土を盛ったベッド状の遺構があることがわかった。

弥生時代の環濠の内南側のものは、竪穴式住居跡と切り合いがあった。住居跡は環濠の埋没後に形成されたものである。

### 3. まとめ

今回の調査でも試掘調査と同様に弥生時代から中世にいたる多くの遺構が検出できた。平安時代末から中世の時期には井戸や土坑のみを検出した。方形の掘形を持つ掘立柱建物には北で西に主軸を振るものと、真北のものがあり2時期以上の建物群に分離できると考えられる。明確な遺構等の出土例はないが、包含層中からは奈良時代の土器も若干出土している。

古墳時代には掘立柱建物跡、竪穴式住居跡を検出した。多くは6世紀前半の時期のもので、北側に竈を持つものが多数を占めている。また、第7トレンチのS H509は大形の竪穴式住居跡で、同トレンチの拡張区南隅においても同規模の竪穴が検出された。隣接する八木町教育委員会の池上第4次調査の結果と合わせると、集落は西側に展開していくものと考えられる。

弥生時代には、方形周溝墓・竪穴式住居跡・環濠が検出できた。方形周溝墓は埋葬主体部が複数で、墓壙の切り合い関係が認められるものもあり、山城地域では埋葬主体部が少数であることと異なることが分かった。住居跡内での粘土の集積から想定される土器作りや、玉作り、磨製石器の製作などが集落内でおこなわれたことが明らかになった。環濠とした溝の北側からは、周溝墓が多く検出されており、弥生時代の竪穴式住居跡が疎らであることから、集落本体は調査区より南側に広がるものと考えられる。また、以上のような調査結果から、弥生時代の池上遺跡が大規模な環濠によって囲まれた、亀岡盆地の拠点集落の1つであることも推定できる。

(なかがわ・かずや=調査第2課調査第2係調査員)

# 平成10年度京都府埋蔵文化財の調査

辻本 和美

平成10年9月25日付け新聞各社の朝刊一面トップは、コバルトブルーに淡く輝く、岩滝町大風呂南墳墓出土のガラス製釧のカラー写真で飾られた。町はこの大ニュースで沸き上がった。現地説明会には、1500人にのぼる見学者が詰めかけ、丹後は夏の終わりに熱く燃えた。

丹後では、ここ数年、これまでの丹後の古代史像を塗り替える数々の大発見が相次いだ。舞鶴市浦入遺跡の縄文前期大型丸木舟、弥栄町奈具岡遺跡の弥生時代玉作り工房跡、遠所遺跡の奈良時代製鉄コンビナート、そして大風呂南墳墓とほぼ同じ時代の王墓の一つである大宮町三坂神社3号墓や多量のガラス小玉が見つかった同左坂墳墓群など大風呂南墳墓発見までの伏線とも言うべき重要な調査があった。しかし、これらは毎年府内各地で行われている数多くの発掘調査の成果のごく一部分であり、日頃の地道な調査の積み重ねが新たな地域史像を書き加えていくものと思われる。

平成10年に実施された京都府内の発掘調査件数は、府文化財保護課の統計では、358件であった。ここでは、平成10年4月から平成11年3月までの平成10年度に行われた府内での主な発掘調査を概観する。

## 1. 旧石器・縄文時代

旧石器時代については、例年同様まとまった調査例はないが、長岡京市長岡京跡右京第620次調査では、包含層からナイフ形石器が2点出土した。

舞鶴市浦入遺跡群は、足掛け4年にわたる調査を終了した。昨年は、縄文時代前期の丸木舟の出土で話題になったが、その後の調査で、縄文時代早期後半から前期初頭に属する良好な土器資料が出土した。これらの土器群は、層位による時期区分が可能であるだけでなく、約6300年前に噴出したアカホヤ火山灰の確認によって時間的な位置付けを与えることができる。このほか、蛇紋岩製抉状耳飾り・琥珀玉など、他地域から運ばれた遺物が見つかり日本海沿岸地域との交易が盛んであったことがうかがえる。

## 2. 弥生時代

岩滝町大風呂南墳墓群は、天の橋立を望む丘陵地に立地する弥生時代後期後半の台状墓2基からなる。冒頭に記したガラス製釧が出土した1号墓の第1主体部は、長さ7.3m・幅4.3mを測る巨大な墓壙をもち、壙内に舟底状の底部を呈する木棺を置く。ガラス製釧は、棺中央の被葬者の左手首と想定される位置から出土した。棺内からは、このほか、鉄剣11・鉄鏃4・ヤス状鉄器・

銅釧13・貝輪1・ガラス勾玉6以上・緑色凝灰岩製管玉100以上が出土した。鉄剣は、1号墓第2主体部から2本、2号墓から1本の合計14本が出土しており、弥生時代の遺跡では、国内最多の出土数となった。ガラス製釧は、最大径9.7cm・厚さ1.8cm、重さ170gを測る。断面五角形で色調は、コバルトブルーを呈している。一部に水銀朱と思われる朱が付着する。ガラス製釧としては、全国で3例目である。被葬者は、豊富な副葬品や構成からみて北部九州との係わりが深い「丹後の王者」と推定されており、今後の整理作業や遺物の個別研究がまたれる。

京都府北部ではこのほか、久美浜町橋爪遺跡(中期)・網野町浅後谷南遺跡(中・後期)、大宮町清漬<sup>せいづけ</sup>6号墓(後期)・宮津市桑原口遺跡(後期)・福知山市奥野部遺跡(中期)の各遺跡で調査があり、綾部市落合遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の灌漑施設がみつかった。

南丹地域の八木町池上遺跡では、集落の南限を限る中期の二重環濠の一部や竪穴式住居跡11基、方形周溝墓14基以上が確認された。方形周溝墓の埋葬主体部は、溝内埋葬を含め1～3基の少数のものと7～8基の多数埋葬の2つのグループがある。また、石鋸の出土から集落内での玉作りが想定される。亀岡盆地北部の弥生集落では、最大級で、当地域では調査例の少ないこの時期の空白を埋める調査となった。

亀岡市余部<sup>あまるべ</sup>遺跡では、中期の方形周溝墓と後期の円形竪穴式住居跡1基が調査され、環濠の一部と思われる溝から赤色顔料が付着した陽物形土製品が出土した。また、園部町今林遺跡では、丘陵地の試掘調査で後期の竪穴式住居跡が確認された。

京都府南部の長岡京市神足遺跡では、中期の方形周溝墓3基・竪穴式住居跡2基が調査された。同町<sup>はごま</sup>裕遺跡では、中期から後期の竪穴式住居跡13基がみつかり、平面六角形の住居跡が確認された。また、鉄剣形・銅剣形の磨製石剣が多数出土した。このほか井ノ内遺跡・長法寺遺跡では、後期の環濠が、南栗ヶ塚遺跡では、中期の方形周溝墓がみつかった。

大山崎町下植野南遺跡では、中期の方形周溝墓19基と朝鮮半島の無文土器の影響を受けたと思われる砲弾形の深鉢土器が出土した。

京都市大藪遺跡では、居住域と墓域の関連を示す後期の竪穴式住居跡、方形周溝墓、環濠等が確認され、大形の方形竪穴式住居跡から壁面の土留用の板杭と外に延びる暗渠排水溝がみつかった。

久御山<sup>いちださいとうほう</sup>町市田齊当坊遺跡では、中期の竪穴式住居跡が50基以上確認され、20本以上の磨製石剣類やヒスイ製勾玉・碧玉製管玉が出土した。山城地域では、最大級の集落跡に発展することが予想され、今後の継続調査に期待したい。

今回最終調査となった八幡市内里八丁遺跡では、後期後半の水田跡がみつかった。

城陽市塚本東遺跡では、溝から庄内式併行期の土器が多数出土したが、このうち近畿北部の特徴をもつ土器が約三分の一を占めていることが明らかになった。

木津町<sup>きづしろやま</sup>木津城山遺跡では、昨年度に引き続き後期の竪穴式住居跡等が調査された。

### 3. 古墳時代

丹後地域の久美浜町谷垣3号墳では、後期前半の木棺直葬墳から府内2例目となる須恵器の皮

袋形提瓶がみつかった。同町南谷古墳群C支群では、前期から後期初頭にかけての4基の小規模古墳の調査があった。

大宮町左坂古墳群のD・E支群では、中期末から後期前半にかけての木棺直葬墳9基が調査され、ガラス製小玉等の副葬品が出土した。同町清漬古墳群では、中期～後期の古墳3基が調査され、須恵器類のほか鋌留短甲片、三環鈴片等の副葬品が出土した。また、弥栄町坂野15号墳でも、後期の木棺直葬墓が調査された。

加悦町<sup>しらげやま</sup>白米山古墳(前方後円墳・全長92m)では、範囲確認に伴う継続調査で、後円部西側段築及び基底部から小型石室、木棺、土坑等の埋葬施設がみつかった。これに隣接する白米山西古墳群では、前期の小型方墳2基の調査が行なわれ割竹形木棺から鉄斧が出土した。

舞鶴市川向古墳群では、組合式箱形と舟形木棺を主体部にする方墳2基が調査され鉄斧等の副葬品が出土した。

福知山市武者ヶ谷1号墳は、埴輪をもつ一辺18mの中期初頭の方墳である。調査の結果、割竹形木棺直葬と小型の竪穴式石室の二種の主体部が確認され、中心主体である前者から仿製の内行花文鏡や玉類が出土した。また、同市西谷古墳群では、後期の横穴式石室が調査された。

乙訓地域の前期古墳を代表する向日市寺戸大塚古墳では、大正12年(1923)に発掘された前方部の竪穴式石室と前方部墳丘の再調査が行われた。この結果、安山岩の板石を積み上げた竪穴式石室の構築方法が判明した。また前方部から、最古級の円筒埴輪棺2基と前方部先端の埴輪および葺石列が検出され、全長95mの柄鏡形の墳形をもつ前方後円墳であることが明らかになった。

長岡京市長法寺七ツ塚古墳群では、2号墳の調査で6世紀中頃の方墳とわかり、帆立貝式古墳の4号墳を除き全て方墳からなることが判明した。同じく井ノ内古墳群では、一辺16mを測る方墳2基が調査され、古墳時代後期の人物・家形埴輪が出土した。今里車塚古墳では、後円部東側の周濠部分の調査により同外堤部から小型方墳の周濠がみつかった。

山城地域の宇治市木幡神社遺跡では、埴輪を伴う後期の小型前方後円墳の周濠跡が、精華町森垣外遺跡と同町北尻遺跡では、前期の小型方墳の周濠がみつかった。

城陽市黒土1号墳は、羨道部のみの調査であったが、6世紀後半では山城地域最大級の両袖式横穴式石室をもつことが明らかになった。出土遺物としては、馬具類がある。

同市の久津川車塚古墳では、周濠の外堤と外濠の調査が行われた。

山城町椿井大塚山古墳では、範囲確認に伴う調査が継続実施された。この結果、前方部墳頂の中軸線上から、古墳を左右対称に築く際の基本線を示すと思われるベルト状に盛り上げられた粘土帯がみつき初現期の前方後円墳の築造過程を知る上で新たな知見を得た。昨年度はこのほか、古墳の全長が175mであること、前方部に二段、後円部に四段のテラスを持つことが確認された。また、墳丘から出土した土師器がいわゆる布留0式併行期のものであり、築造時期は3世紀後半頃と想定され、従来の年代観より若干古くなった。なお、椿井大塚山古墳の正式報告書が、発掘調査から約半世紀ぶりに山城町教育委員会から刊行された。関係者のご努力に敬意を表したい。

木津町片山古墳群では、終末期の横穴式石室をもつ円墳1基が新たに検出された。築造時期は、

付表1 平成10年度発掘調査地一覧表(当調査研究センター調査分)

番号	遺跡名	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	橋爪遺跡第5次	集落	久美浜町	村田和弘	5～7月	(久美浜高校) 弥生～古墳時代の遺物包含層。
2	南谷古墳群	古墳	久美浜町	石尾政信	5～8月	(C支群) 古墳1基・古墳状隆起3か所。
3	永留城跡	城跡	久美浜町	石尾政信	8～10月	郭。ピット。
4	浅後谷南遺跡	集落	網野町	黒坪一樹 石崎善久	4～11月	古墳時代前期の浄水施設、木器、形代。平安時代の掘立柱建物、八稜鏡。
5	シミズ谷古墳群	古墳	弥栄町	竹井治雄	4～5月	顕著な遺構・遺物なし。
6	墓ノ谷古墳群	古墳	弥栄町	竹井治雄	6～7月	古墳状隆起3か所。
7	奈具岡遺跡第9次	集落	弥栄町	筒井崇史	8～11月	弥生時代後期～古墳時代中期の竪穴住居。
8	通り谷城跡	城跡	峰山町	増田孝彦	7～9月	古墳2基。炭窯4基。
9	今井城跡・今井古墳	城跡	峰山町	黒坪一樹	12～3月	古墳1基。城跡1か所。
10	左坂古墳群	古墳	大宮町	引原茂治	7～11月	(D・E支群) 古墳13基。古墳時代中期～後期の木棺墓。
11	桑原口遺跡第4次	集落	宮津市	増田孝彦 岡崎研一	5～11月	弥生時代後期の竪穴住居、溝。中世の木器。
12	今福古墳群	古墳	宮津市	増田孝彦 岡崎研一	5～7月	古墳1基・古墳状隆起3か所。鍛冶滓。
13	川向古墳群第2次	古墳	舞鶴市	河野一隆 福島孝行	4～7月	前期古墳2基。木棺墓。
14	今林遺跡	集落	園部町	戸原和人	8～10月	弥生時代の竪穴住居。
15	池上遺跡	集落	八木町	中川和哉 野々口陽子 筒井崇史	10～3月	弥生竪穴住居、方形周溝墓、環濠。古墳時代後期の竪穴住居。平安時代～中世の掘立柱建物。
16	余部遺跡第5次	集落	亀岡市	野々口陽子 中川和哉	9～11月	弥生時代竪穴住居、方形周溝墓、陽物形土製品。古墳時代後期の竪穴住居。
17	太田遺跡第5次	集落	亀岡市	岡崎研一	10～2月	古墳時代の竪穴住居。奈良時代の掘立柱建物。
18	成勝寺跡・岡崎遺跡	寺院	京都市	有井広幸 野々口陽子	4～6月	古墳時代後期の竪穴住居。平安～鎌倉時代の掘立柱建物、井戸。
19	平安京跡右京一条三坊九・十町	都城	京都市	村田和弘 石尾政信	10～3月	(山城高校) 平安時代の溝、掘立柱建物跡。
20	平安京跡二条大路	都城	京都市	福島孝行 引原茂治	12～3月	(朱雀高校) 平安宮南陸。池州浜。
21	中海道遺跡	集落	向日市	藤井 整	11～1月	弥生時代の竪穴住居。
22	長岡宮跡宮内第372次	都城	向日市	田代 弘	1～2月	顕著な遺構・遺物なし。
23	長岡京跡右京第615次・井ノ内遺跡	集落	長岡京市	竹井治雄	9～12月	弥生時代後期の環濠。古墳時代後期の竪穴住居。
24	長岡京跡右京620次	都城	長岡京市	戸原和人	10～1月	長岡京期の掘立柱建物跡。
25	下植野南遺跡・長岡京跡右京第589次	集落	大山崎町	戸原和人 石井清司 竹下士郎 中村周平 松尾史子 野島 永	4～2月	弥生時代中期の方形周溝墓群。古墳時代後期の竪穴住居、掘立柱建物、石製模造品。



26	算用田遺跡	集落	大山崎町	野島 永	12～1月	顕著な遺構・遺物なし。
27	市田齊当坊遺跡	集落	久御山町	竹原一彦 岩松 保 森島康雄 柴 暁彦	9～3月	弥生時代中期の竪穴住居、方形周溝墓、玉作り関連遺物。 古墳時代後期の方墳。
28	内里八丁遺跡	集落	八幡市	森下 衛 柴 暁彦	4～6月	(E地区) 弥生時代後期の水田跡。
29	木津川河床遺跡	集落	八幡市	森下 衛	11～1月	古墳時代前期の竪穴住居。
30	芝山遺跡	集落	城陽市	増田孝彦	12～2月	平安時代前期の木棺墓。石帯巡方、緑釉陶器。
31	興戸宮ノ前遺跡	集落	京田辺市	藤井 整	8～10月	中世の溝、木樋、井戸跡。
32	畑ノ前遺跡	集落	精華町	岩松 保	5～6月	弥生時代の土坑。奈良時代の瓦。
33	森垣外遺跡第3次	集落	精華町	小池 寛 松尾史子	5～3月	古墳前期方墳、中期～後期の竪穴住居、掘立柱建物、石製模造品。
34	菰池遺跡	集落	木津町	伊賀高広 森島康雄	4～10月	奈良時代土馬。江戸時代の掘立柱建物。
35	木津城山遺跡第2次	集落	木津町	古瀬誠三 伊賀高弘	4～2月	弥生時代後期の竪穴住居跡。 古墳時代終末期の横穴式石室。
36	大島遺跡第3次	集落	木津町	竹原一彦 岩松 保	6～10月	古墳時代後期の竪穴住居、掘立柱建物。

7世紀前半で、須恵質の四注式屋根形陶棺が納められていたことが判明した。

次に集落遺跡の調査としては、府北部の網野町浅後谷南遺跡で、昨年度注目された古墳時代前期の水辺の祭祀に係わる木樋(木製浄水施設)の上流部から、新たな導水施設や剣・鳥形木製品等多量の木製品が出土した。このほか、大宮町新宮遺跡では後期、福知山市今安遺跡では前期の竪穴式住居跡の調査があった。

南丹地域の八木町池上遺跡では、100基以上の古墳時代中期から後期にかけての竪穴式住居跡が検出され、府内ではこの時期の集落跡のまとまった調査例となった。亀岡市余部遺跡、同太田遺跡でも同時期の竪穴式住居跡が見つかった。

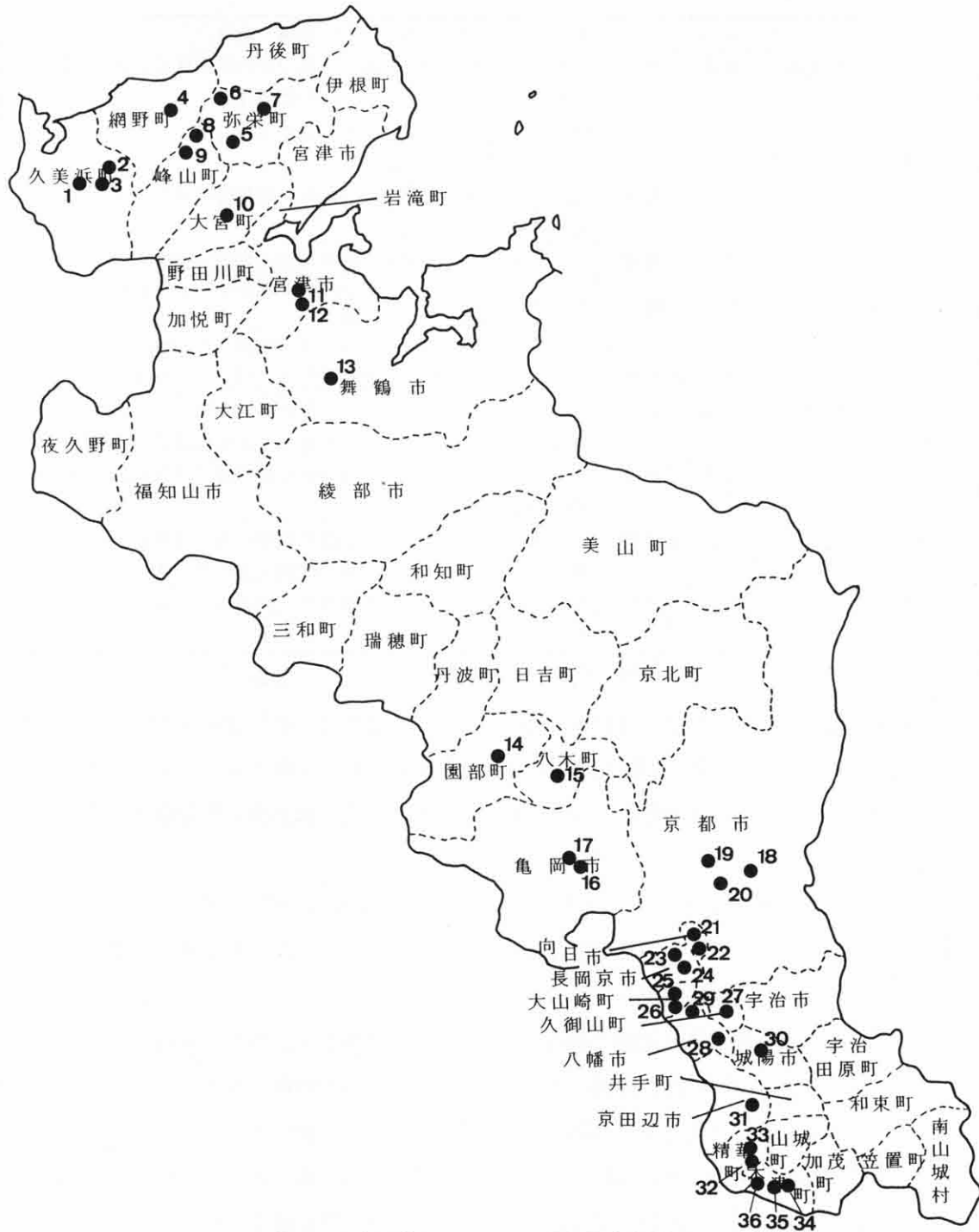
府南部では、大山崎町下植野遺跡で後期の竪穴式住居跡30基が検出され、滑石製玉類が多数出土した。長岡京市雲宮遺跡では、後期の竪穴式住居跡と大型の木製梯子が見つかった。京都市岡崎遺跡、中臣遺跡、長岡京市井ノ内遺跡では、後期の竪穴式住居跡の調査があった。

また、精華町森垣外遺跡では、中期から後期の竪穴式住居跡と滑石製模造品や陶質土器が出土した。木津町大島遺跡では、後期の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が調査された。

祭祀遺跡としては、日本海への出入り口となる舞鶴湾口に位置する舞鶴市千歳下遺跡から、5世紀後半頃の青銅鏡片や各種の滑石製品・鉄片が出土した。府内では珍しい海上交通に係わる祭祀遺跡として注目される。

#### 4. 飛鳥・奈良時代

亀岡市太田遺跡では、奈良時代の掘立柱建物跡が見つかった。同市池尻廢寺では、今年度から寺域確認のための調査が開始された。



第1図 当調査研究センター発掘調査地位位置図

八幡市志水廃寺に附属する志水瓦窯跡では、再調査の結果、7世紀後半の良好な登窯の構造が明らかになった。

城陽市芝ヶ原遺跡では、竪穴式住居跡と掘立柱建物跡が調査され、7世紀前半から8世紀前半にかけての集落の様相が明らかになった。宇治市妙見遺跡では、8世紀の火葬墓が検出された。

離宮跡か寺院跡かで論争がある木津町樋ノ口遺跡では、これまでの遺跡推定範囲の東側で広範囲の調査が行なわれ、瓦葺き築地塀の痕跡が東西約90mにわたって続くことが確認された。出土遺物には、緑釉陶器や平城宮式から8世紀末頃の軒瓦が多量にみられ、平城宮や中央政権に結び

つく施設の存在することが再確認される結果となった。

山城町高麗寺跡の北側に位置する上狛東遺跡<sup>かみこまひがし</sup>では、奈良時代中頃の大型掘立柱建物跡がみつかり、同寺を造営した氏族の居館跡ではないかと推定されている。

加茂町恭仁宮跡では、内裏地区の東側に並んで位置するもう一つの区画の北辺を限る堀と思われる掘立柱列がみつかった。区画の機能解明は、次年度の調査に期待したい。

## 5. 平安時代

長岡京跡関係では、向日市の宮内第373次調査で初めて宮城門(東面北第一門)の基礎部分が見つかった。東一坊大路と一条条間路の交差点で平安宮の位置では「上東門」にあたる。門の造営時期は、出土した軒瓦の型式編年から長岡宮後期に比定される。同宮内369次では、幅9mを測る北京極大路の北側溝が確認された。同じく左京第218次調査では、「大歌所」「大歌」「政所」の須恵器墨書土器が出土し、長岡京時代からすでに組織として「大歌所」が成立していたことが明らかになった。長岡京市右京第609次調査では、鍛冶工房の存在をしめす遺物が多数出土した。同右京第620次調査では、京内最大級の掘立柱の倉庫跡が見つかった。このほかにも注目される調査があるが、それらについては、本誌連載の「長岡京跡調査だより」を参照されたい。

平安京関係では、淳和天皇の離宮、淳和院跡の調査があった。池への導水溝や八稜鏡片・緑釉陶器・中国製陶磁器が出土し、9世紀前半から10世紀中頃まで3期にわたって改作されたことがわかった。中京区の右京三条二坊十四町の調査地では、平安中期の貴族邸宅跡の井戸跡から祭事の装飾具を付けた馬を墨書する木製折敷が出土した。絵馬の下絵と考えられ、全国で20例余り、平安京内では初の発見となった。この調査では、10世紀頃に洪水等によって右京域が廃されていく様相が明らかになった。下京区では、小六条殿跡から平安時代後期の築地堀柱跡が見つかった。西市跡では、平安時代前期の掘立柱建物跡群と井戸跡がみつかり、最少単位で構成される宅地跡の例が明らかになった。京外梅ヶ畑の向ノ遺跡からは、「□寺」「秦□」等の墨書土器が出土した。平安時代前期の国家的な雨乞い祭祀遺跡とされている。

府北部の舞鶴市天台南遺跡<sup>てんだいみなみ</sup>では、平安後期から鎌倉時代初期の青銅製の経筒が見つかった。

乙訓地域の向日市中福知遺跡<sup>なかつくち</sup>では、中期頃の建物跡群がみつかり、長岡京遷都後も長期にわたって公的施設が存在した可能性が指摘された。

大山崎町大山崎遺跡群の山城国府跡第49次調査では、山城国府・山崎駅家、あるいはこの後身である河陽離宮跡と思われる平安時代前期の礎石建物跡が確認された。出土瓦の大半は、河内竹原井頓宮で多用された青谷廃寺式軒瓦が占めており、軒瓦の転用からも国の強い関与が想像される。このほかでは、平安時代初期の山陽道跡がみつまっている。

宇治市平等院境内では、庭園整備に伴う調査で、鳳凰堂改修時に石材加工を行なった12世紀前半の木工作業所跡と僧坊「南泉坊」の庭園遺構、平安時代の道路跡の一部等が見つかった。なお、これまでの調査成果を踏まえ、本年から庭園の本格的復原整備がはじまった。

同市白河金色院跡からは、平安後期の金色院関連施設と思われる建物跡が見つかった。

城陽市芝ヶ原遺跡の試掘調査では、平安時代前期の木棺墓が確認され、棺内から棺材の留め釘や石帯巡方・緑釉陶器がみつかった。

京田辺市二又遺跡では、この付近に想定される「山本駅」に関連した平安前期の掘立柱建物跡がみつかった。

## 6. 鎌倉・室町・江戸時代

向日市物集女城跡では、城を囲む濠の南西角とL字に曲がる土塁が調査され、応仁の乱(1467年)に備えられた約70m四方の方形単郭式城館跡であることがわかった。京都市大藪遺跡でも、室町期の居館の堀跡の調査があった。

長岡京市勝龍寺城跡では、16世紀後半の石仏や一石五輪塔を混じえる石組井戸がみつかった。

大山崎町大山崎遺跡群の調査で、荏胡麻油を生産する際に使用された室町時代の木臼が出土した。中世、山崎の離宮八幡宮では、「油座」と呼ばれた同業者組合を組織し威勢を誇った。このほか、離宮八幡宮西側の池跡の調査(山城国府跡第49次調査)では、同社と豊臣政権との結びつきを窺わせる三巴文金箔瓦が出土した。

京都市鞍馬二ノ瀬町では、民家の石垣工事中に、藁縄で束ね曲物に入れられた北宋銭等約4万枚がみつかった。14世紀前半頃に埋蔵されたものと思われる。

京都市山科区山科本願寺跡では、御本寺の南西側の土塁と堀跡が調査され、土塁が高さ8m・幅15mに及ぶ大規模なものであることが確認され、当時の本願寺勢力の強大さをうかがわせた。

伏見城城下町では、江戸時代の大名屋敷跡の石垣が、300mにわたって調査された。

市内中京区の松平家京屋敷跡の調査では、洛中洛外絵図に描かれた江戸時代初期の台所や収蔵倉庫と思われる建物基盤がみつかった。同じく市内竹屋町では、鎌倉時代の歌人藤原家隆の和歌を器の底部に釉薬で書いた江戸初期の織部焼向付が出土した。上京区の京都御苑内では、江戸初期から後期にかけての公家屋敷群跡の調査が行われ、公家町の変遷を知るうえの基準となる資料が得られた。

京都国立博物館敷地内の豊臣秀吉ゆかりの方広寺旧境内の調査では、境内南辺の石垣と安土桃山時代に建立された南門跡および複廊式の回廊跡が確認された。南門は、これまでの推定より規模の大きな八脚門であった。また、幾度となく再興され「京の大仏」と親しまれた金銅大仏鑄造時の鑄型がみつかり、歴史の教科書での有名な出来事が具体的な姿で登場した。

新年度がはじまった早々の4月2日に、当調査研究センターの堤圭三郎理事が急逝されました。堤理事は、長年にわたり京都府の埋蔵文化財調査並びに文化財保護行政のバイオニアとして第一線で活躍してこられました。職員一同、これからも様々な面での御指導を願っていただけに残念でなりません。御冥福をお祈りいたします。

(つじもと・かずみ=当センター調査第2課調査第3係長)

## 平成10年度発掘調査略報

26. へいあんきょうあとにじょうおおじ  
平安京跡二条大路

所在地 京都市中京区西ノ京式部町1番地

調査期間 平成10年12月11日～平成11年3月12日

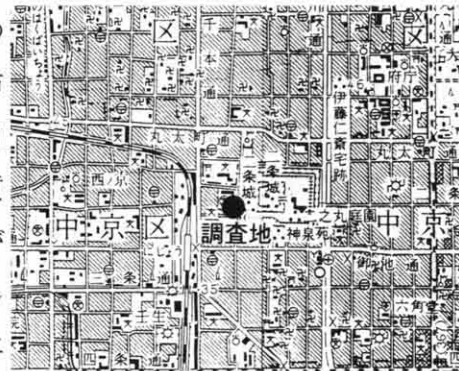
調査面積 約1,300m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は府立朱雀高校の体育館改築工事に伴い、京都府教育委員会管理課からの依頼を受けて実施した。調査は体育館の工事範囲内にトレンチを設定して行った。

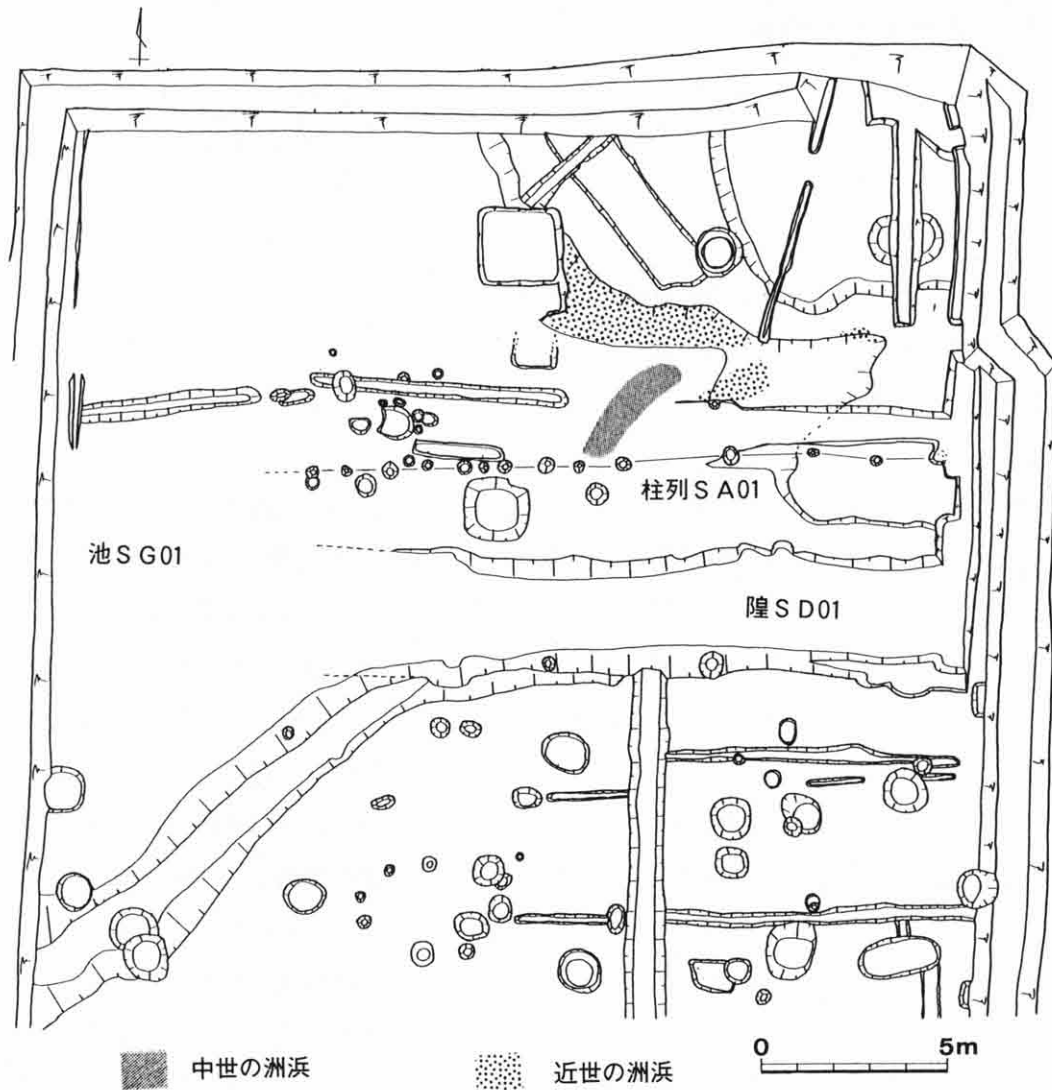
調査概要 平安時代の遺構には平安宮南隍S D01がある。幅3m・深さ40～50cmを測る。埋土は大きく3層に分かれ、上層は小規模な土石流、中層は暗灰褐色砂質シルト層で当初の溝を再掘削した層で、これによって上端が10尺に拡張されている。また、下層は小規模な土石流層で、当初の南隍であると考えられる。遺物は平安・鎌倉時代の瓦・白磁片である。

中世の遺構には池状遺構S G01がある。S G01はS D01を切り、また再利用して作られた池状の遺構である。検出した規模は南北24m・東西22m・深さ約30cmを測る。汀線は標高36.8m付近となる。池は一度陸化してから再び池として再利用されていることが埋土から読みとれる。池の北東部は3cm大～拳大の礫で洲浜が形成されており、洲浜が2回形成されていることから埋土に見られる池を形成した時期が2回あることを傍証している。また柱列S A01は平安宮の塙地部分に掘られた柱列である。この柱列は池状遺構S G01によって切られており、埋土からは平安時代の瓦のみ出土したことから、平安後期以降中世前期のある時点に築かれた柵または一本柱塙であると考えられる。この柱列は平坦で広い塙地部分を囲い込んで宅地化したものと考えられる。またトレンチ南部で柱列S A03・S A04の2列の柱列を確認した。これらも柱列S A01と同様に二条大路を囲い込んで宅地化したものと考えられる。

出土遺物 平安時代の遺物のほとんどが瓦である。軒丸瓦は蓮弁が剣頭化した蓮華文を持つものが出土している。軒平瓦は均整唐草文のほか、巴文のものが出土している。平瓦は凸面に縄目叩き、凹面に布目圧痕があるものがほとんどで、一部凸面に粗い格子目叩きのものが見られる。中世の遺物としては銭貨、瓦質の羽釜、龍泉窯系の青磁、土師皿、花崗岩の剥片などがある。このうち花崗岩の剥片は花崗岩の石製品を加工した際に出る剥片と考えられ、神戸市郡家遺跡などで出土例がある。銭貨には皇宋通寶・景德元寶・治平元寶・祥



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 トレンチ北部平面図(1/200)

符通寶などがある。近世に属する遺物としては金箔瓦がある。桐文と巴文の軒丸瓦、桐文の極先瓦が出土している。金箔は外周と文様部に施されている。また陶磁器、棧瓦が各遺構から出土している。

まとめ 今回の調査では1973年の京都市の調査で検出されていた平安宮南隍の位置を再確認するとともに、北側に存在することが予想された築地の検出に努めたが、隍は検出されたものの、築地は中世、および織豊期の池を伴う庭園によって破壊されていることが明らかとなった。池は洲浜を形成しており、導水口として平安宮南隍を浚せつして再利用している。堀地や二条大路は後に堀などで囲い込まれて宅地化していく様子が見られる。二条城築城後にはかつて二条大路だった所に井戸などが盛んに形成されていることが追認された。これらの調査結果から平安京が解体し、秀吉の御土居に囲まれた洛中へと変遷していく過程を垣間見ることができよう。

(福島孝行)

## 27. <sup>なが おか きゅう あと</sup>長岡宮跡 第372次 (7ANBND-2)

所在地 向日市寺戸町西ノ段5番地

調査期間 平成11年1月6日～平成11年2月19日

調査面積 約210m<sup>2</sup>

はじめに 向日町競輪場の施設改修にともない、発掘調査を実施した。調査地は、向日町競輪場敷の北西角に位置する。この地点は、長岡京条坊復原によれば、長岡宮の北西域にあたる場所で、宮域の西端の構造を知る上で重要な地点である。向日町競輪場内では施設改修に伴って1986年(長岡宮跡第164次)、1991年(長岡宮跡第250次)の二次にわたって当調査研究センターが調査を実施しており、それぞれ重要な成果を得ている。長岡宮跡第164次では、宮域内の区画溝と推定される溝、長岡京期の建物跡、土坑がみつかった。長岡京期の軒瓦や土師器・須恵器が出土し、土坑SK16409からは木箱に納められた緑釉唾壺が出土した。長岡宮跡第250次では、長岡京期の遺物群とともに、西一坊大路東側溝とみられる溝の一部が検出された。長岡京期の遺物群とともに、西一坊大路東側溝とみられる溝の一部が検出された。これらは、宮域の西端の状況を示す資料として重要なものであり、今回の調査でも長岡京に関連する成果が得られるものと期待された。

調査結果 調査地は、攪乱土層が地表下約1.5mまで認められ、これをすべて除去した。作業の進行に応じて適宜写真撮影を行ない、記録を作成し、座標は委託によって設置した。精査の結果、調査地は旧建物の基礎工事など後世の攪乱によって、段丘礫層まで削平されていることがわかった。土層の堆積状況について記すと、黄灰色の砂質土と堆積岩の礫層が互層となった地山である段丘礫層があり、その直上に塵介を含む攪乱土層が直接堆積していた。この攪乱土層は、既設建物を建築する際に、まず地山を削平し、その後、場外から搬入した土砂を盛土したもののようである。盛土には近年生じた塵介のみが含まれており、考古学的な遺物を認めることはできなかった。地山削平面から表土までは全て盛り土であり、包含層は一切認められなかった。地山上で遺構を探したが、地山そのものが大きく削平されているために、遺構面は既に無く、したがって、遺構を検出することはできなかった。

おわりに 本調査地は、長岡宮推定地内に位置し、周辺で重要な成果を得ていることから、長岡宮関連の遺構・遺物を期待して調査に着手した。しかし、上述したように、後世の攪乱を著しく受けており、関連遺構を検出することはできなかった。

(田代 弘)



調査地位置図(1/25,000)

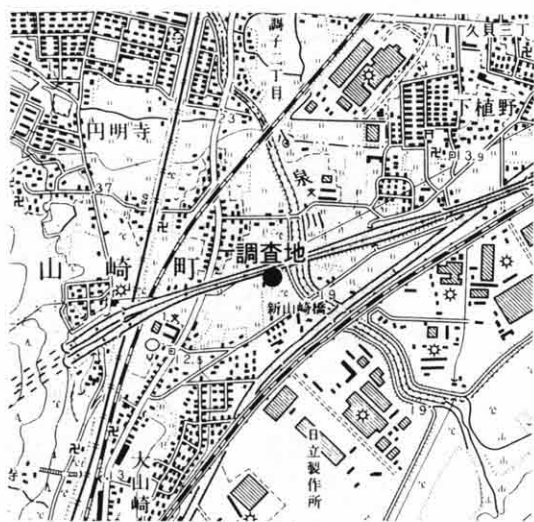
## 28. 算用田遺跡

所在地 乙訓郡大山崎町円明寺小字井尻地内  
 調査期間 平成10年12月7日～平成11年1月23日  
 調査面積 約300m<sup>2</sup>

はじめに 乙訓郡条里では、三条八里十二坪に位置し、調査地の南側に二条と三条の坪界線の遺存地割として田内小径が東西に走る。名神高速道路における下植野ジャンクション開設に伴う車線部分の調査のため、東西に長いトレンチ(南北幅約6～7m・東西長さ約48m)を掘削した。

調査概要 遺構面は、淡青灰色粘土層直下(標高10.76m前後)にあり、東壁から約10mほどの地点で、南北に走るSD01を検出した。SD01は、幅1.3～2.8mで、長さ約3.5mを検出し、弥生土器が出土した。中央部でも、近世～近・現代の耕作土と砂礫土層が厚く堆積している。その下には同様に淡青灰色粘土層、有機質を含む黒灰色粘質土層が堆積しており、遺構検出面以下、濁暗青灰色砂礫土層や暗緑灰色粘土・シルト層などが堆積していた。濁暗青灰色砂礫土層(標高10.6～10.7m)からは、瓦器椀細片が出土しており、すくなくとも中世以降に、洪水等に伴う弥生時代遺構面の流出と砂礫層の堆積が進行したものと見られる。西側では、中央部とは異なり、中央部以東に厚く堆積していた淡青灰色粘土層が削平され、新たな流水による堆積が認められたが遺物の出土はなかった。SD01出土土器は、弥生時代後期末～庄内式併行期に位置づけられるものである。大形の壺型土器は、西部瀬戸内系土器とされるもので、胎土も異なることから、搬入された可能性が高い。また、いわゆる生駒西麓産の土器片も含まれていた。

まとめ 今回の調査は、部分的な範囲にとどまったが、弥生時代終末期、当地に他地域の土器



調査地位置図(1/25,000)

が搬入された状況が想定される。近辺の下植野南遺跡の平成10年度試掘調査における当該時期の山陰系土器なども考慮すれば、西日本の交流の一結节点として、当該地域が機能していたことが窺えるであろう。また、中世以降における洪水による砂礫の堆積と中・近世の流路などの堆積状況を検出した。近辺の乙訓郡条里の状況から、調査地トレンチ東端の東、約10mほどで、十二坪と十三坪の坪界がみとめられ、調査地東側では、弥生時代の遺構面や条里地割に規制された中世遺構面が良好に遺存しているものと推察できる。(野島 永)



## 29. しばやま 芝山遺跡

所在地 城陽市字富野

調査期間 平成10年12月9日～平成11年2月18日

調査面積 約680㎡

はじめに この調査は、木津川右岸運動公園整備に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受け実施したものである。芝山遺跡は、城陽市のほぼ中央部、木津川右岸の丘陵上に立地する、縄文時代から中世に至る複合遺跡である。丘陵上を中心に過去4次にわたる調査が行われ、古墳時代～奈良時代にかけての多くの遺構・遺物が検出された。これらの調査では、丘陵内で削平された古墳14基も新たに確認されている(芝山古墳群)。

調査概要 調査地は、芝山遺跡の東端の、南北に延びる丘陵稜線上が試掘の対象となった。ここは、(財)青少年野外活動総合センター友愛の丘キャンプ場となっており、試掘対象地に13か所のトレンチを掘削した。その結果、キャンプ場造成に伴い遺構は削平されたようで、検出されなかった。出土遺物からすると、弥生時代～中世までの遺物が認められることから、調査地でも何らかの遺構が存在していた可能性が高い。削平度が少なかった部分では古墓1基が検出された。

古墓は、平面隅丸長方形を呈する木棺直葬墓であり、長さ2.25m・幅0.65m・深さ0.17mを測る。主軸は、N12°Wである。遺物は、棺北端の小口付近より土師器皿2点・緑釉瓶子1点、棺中央部西側で石帯(巡方)1点が出土した。棺両木口では側板と木口板を固定していたと考えられる釘がそれぞれ2本ずつ出土した。また、天井板の固定に使用されていたと考えられる釘も3本出土している。周辺には、溝などの墓域を区画するような施設は認められなかった。削平を受け

た可能性もある。出土遺物は、9世紀中頃に比定されるものである。

石帯の出土により律令官人のこの地域での墓制の一端を垣間見ることができるとともに、奈良時代後期から平安時代前期の芝山遺跡の性格を考えていく上で、重要なものとなった。

(増田孝彦)



調査地位置図(1/25,000)

## 30. 木津城山遺跡第2次

所在地 相楽郡木津町大字木津小字片山

調査期間 平成10年4月20日～平成11年2月25日(7月～11月中断)

調査面積 約2,000m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、関西文化学術研究都市の整備事業に伴い、住宅・都市整備公団の依頼を受けて実施したものである。木津城山遺跡は、京都府の南端に位置する木津町の東部丘陵の縁辺で、平地部との比高約60mを測る丘陵上に立地する。この遺跡の調査は、平成9年度から実施しており、今回で2年次目となる。初年度の1次調査では、周知の木津城跡の範囲確認のためその周囲に調査区を配したところ、弥生時代後期の集落および墳墓遺構と終末期古墳を検出した。今回は、木津城主郭の南側の地区に配水池の建設が計画されたので、面的な調査を実施した。

**調査概要** 今回の調査では、弥生時代後期後葉の集落遺構と古墳時代終末期の古墳を1基検出した。集落関連の遺構は、住居跡15基、段状遺構4か所、壕状の溝1条などである。

住居跡は、平坦面に立地するものは竪穴式住居であるが、山腹斜面に営まれたものはテラス状住居の構造を採る。概して周壁の残存状況は良くないが、それが示す平面形は、隅丸方形と円形の2種が認められ、その割合はほぼ同数を示す。住居の規模は、一辺4.0mから直径6.0mの範囲におさまり、概ね標準的なサイズを示す。支柱穴の配置は不規則なものが多いが、中には同一円周上に4基以上の柱穴が並ぶものがある。屋内の火処は不明なものが多いが、床面の中央に径0.6m・深さ1.2mの深い土坑(中央ピット)をもつ住居がある。

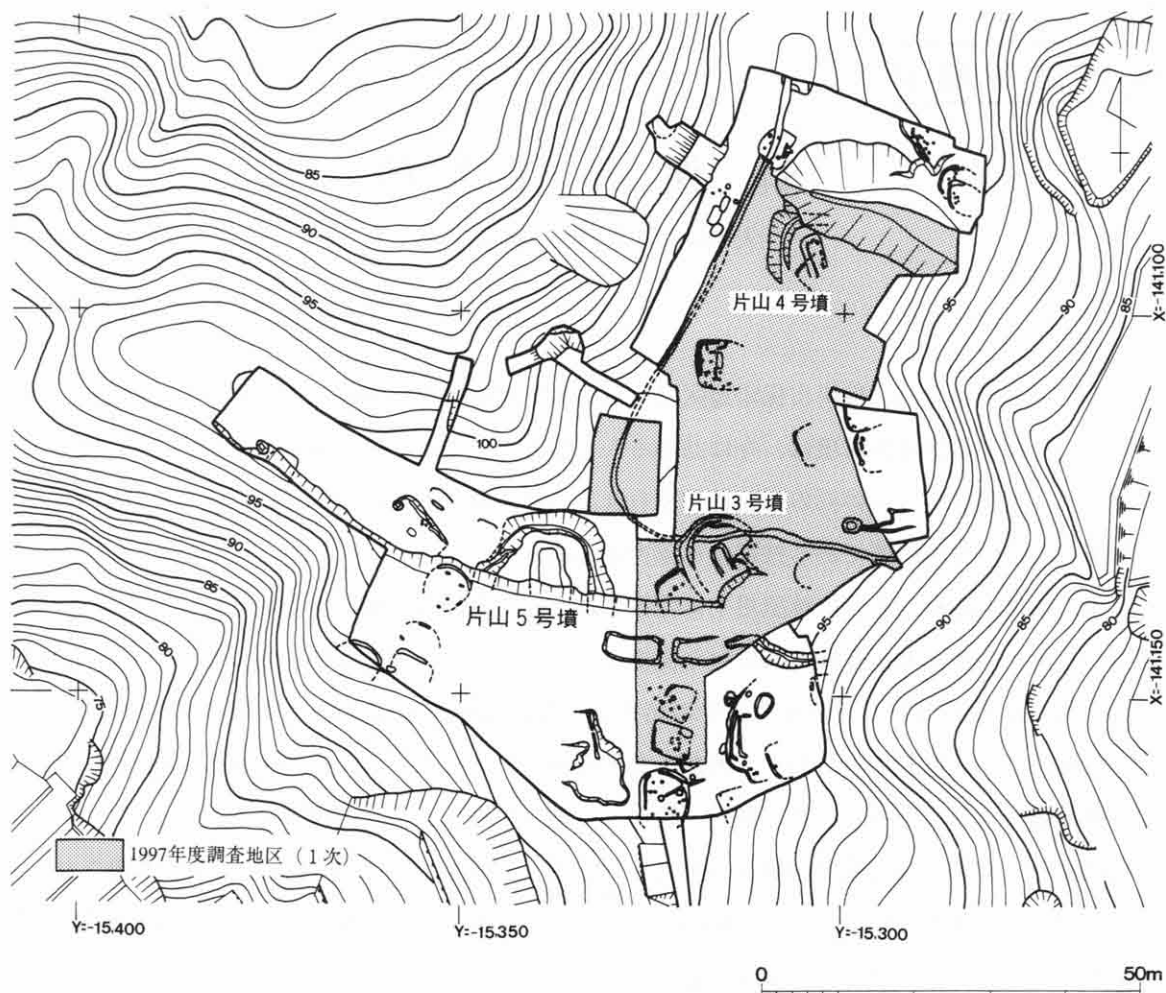


第1図 調査地位置図(1/25,000)

段状遺構は、テラス状住居の規模を大きくしたもので、それと同じ原理で構築した一種の宅地造成地形である。内部の平坦面には住居の周壁溝やピットが複数認められる。

壕状遺構は、集落の内部を画するように掘られた東西方向に直線的に延びる幅3.0mの逆台形断面を呈する溝である。1次調査分も含めて30m分を確認したが、東側はさらに山腹斜面を流れ下るように調査区外へのびている。

古墳(片山5号墳)は、主尾根から西側に折れる支脈の基部付近の南側斜面に営まれたものである。古墳の背後の標高の高い側に幅2.0～3.0



第2図 調査トレンチ配置図

mの周溝を巡らせて墳丘を外部から画している。墳形は、周溝の主軸が示すラインから、やや変形した円墳(直径約15.0m)とみられる。内部主体は横穴式石室だが、後世に大規模な攪乱を受けており、石室の石材もほとんど抜き取られている。わずかに残された床面(羨道部)から須恵器杯A 2点が、副葬品として原位置を保って出土した。また、石室の前面(南側)に展開する遺物包含層から須恵質の四注式屋根形陶棺の小破片が出土しており、元来この古墳の主体部内に陶棺が納められていたことが窺われる。

まとめ 今回検出された遺構は、1次調査で検出されたものと同様の内容をもつもので、弥生時代後期前葉の集落と古墳時代終末期の古墳群がより広範囲に展開している様子が明らかとなった。このうち、複数の住居跡などによって構成される集落遺構については、造営された年代や立地環境から、典型的な高地性集落であることは言うまでもない。とくに、当集落の造営開始期である弥生時代後期初頭という時期は、汎西日本的にみられる集落関係の変動期であり、この時期を境にして、中期安定型の集落は一旦解体して別の場所に再編成されるという現象が各地で見られる。木津城山遺跡の場合、現在までに約26基の住居跡が検出されているが、その全体規模は、広域に配した試掘の結果などから、さらに広がることが予想され、規模の大きな高地性集落の部類に入る。

(伊賀高弘)

## 府内遺跡紹介

## 84. 保津山古墳

—失われた遺跡を復原する—

保津川下りの出発点、亀岡市保津地区は、現在も風光明媚な田園風景をとどめているが、その山寄りに所在する保津山古墳は、今は訪れる人もほとんどなく、雑木林の中にひっそりとたたずんでいる。墳頂部には主体部の石棺材とみられる石材が樹立している。また、周辺には前方部が一部削られた前方後円墳である按察使車塚古墳がある。

この古墳は、昭和12年に山林開墾中に発見されたが、調査員が駆け付けた時には、主体部が破壊された上に副葬品も抜き取られていた後であった。そこで、発見者の記憶に基づいて、主体部構造の復原と再調査が実施された。その結果、主体部は板石を組み合わせた箱式石棺で墳頂下70cm程度の部分に埋置されており、天井石も架構されていたという。その中から、歯や四肢骨などの被葬者の遺骸に伴って、鏡・勾玉・管玉・長剣・鉄鏃・斧などの副葬品が出土している。この状況から、被葬者は北東に頭位を定めて、頭部付近に鏡を置いて葬られたことが推定される。また、棺内には朱を散布したらしい痕跡も認められた。古墳の副葬品から、この古墳は古墳時代前期末から中期前半に築かれたものと推定できる。

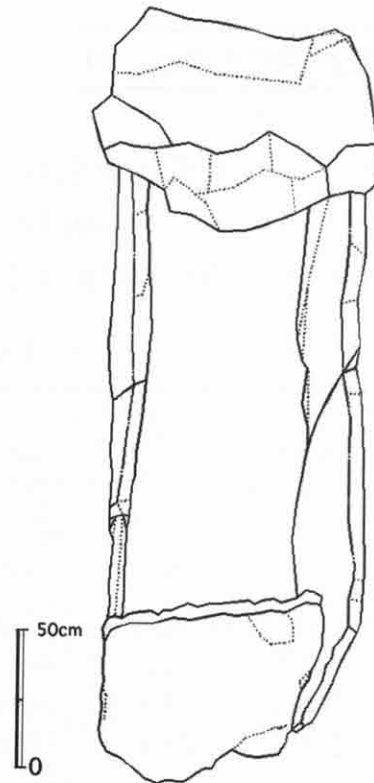
**遺跡の意義** ところで、このような古く調査された遺跡を持ち出したのは、この保津山古墳に関する情報が、調査条件が整っていなかったために、十分な記録がなされたとは言い難く、今、再検討をしようと思えば、写真にしか頼る材料がない遺跡の情報をどのように抽出するかを議論したかったからである。この場合、聞き取り調査を実施して、情報を再構成することが必要となるが、それもままならない場合も多く、いきおい個人の記憶に頼る部分も大きいため、規模や法



第1図 遺跡の位置(1/25,000)

量はあやふやなものになりがちである。写真から、遺跡の客観的な、換言すれば数値化されたデータを復元する手段は無いのだろうか？

近年、コンピュータを使ったCAD (Computer Aided Design)の発達は著しく、操作性も向上している。その中で、デジタル的に平面図・立面図を発生させる方法も可能となってきた。それは、簡単に説明すると、写真中に基準点となる点を写し込み、その長さをコンピュータの画面上で定義してやれば、正射投影の図面が完成するというものである。一般に、写真の場合は、



第2図 保津山古墳石棺写真(参考文献 図版第24より)と復原図

1点から投影した画像が得られるために、近くのは短く、遠くのは長く移る。基準点を写し込むことによって補正してやれば、デジタル的な正射投影画像を得ることができるのである。一見、これは夢物語のように聞こえるが、GIS(地理情報システム)の分野では、オルソ・フォトグラフとして開発されている技術であり、正射投影図に正射投影写真を重ねてやれば、表面の質感をそのまま生かした実測図兼写真を合成する事も理論的には可能となる。

そこで、この保津山古墳の写真をもとに平面図を起こしたものが第2図である。原報告は「尺」単位で図面が作成されているために、現在使える情報にはなりにくい。そこで、石棺の量方をCAD上で補正した図面に代入し、かつ過去の図面をも参考にして、失われた保津山古墳の石棺の復原を行った。ただ、残念ながら傾きなどの細部のデータを代入していないために、完全に正確な平面図にはなっていない。今までの考古資料の作成技術は、調査者の技術や調査条件に規制される部分が大きかった。しかし、コンピュータを利用することによって、その部分をカバーすることもある程度可能になってきている。もちろん、考古学的な測図作業も研究的作業の点では不可欠なものと言えるし、このような復原では精度の保証ができないという危険性もある。しかし、一方で、多様な考古資料が氾濫する現在において、研究の現状に応じたレベルの標準化が模索されても良い時期ではなかろうか？

**遺跡の案内** JR亀岡駅から保津方面行きの京都交通バスで、保津下車。古墳は雑木林中にあるため分かりにくい。墳頂には石棺蓋として利用されていた板石が立てられている。

(河野一隆)

参考文献 「保津村保津山古墳」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十八冊) 1928

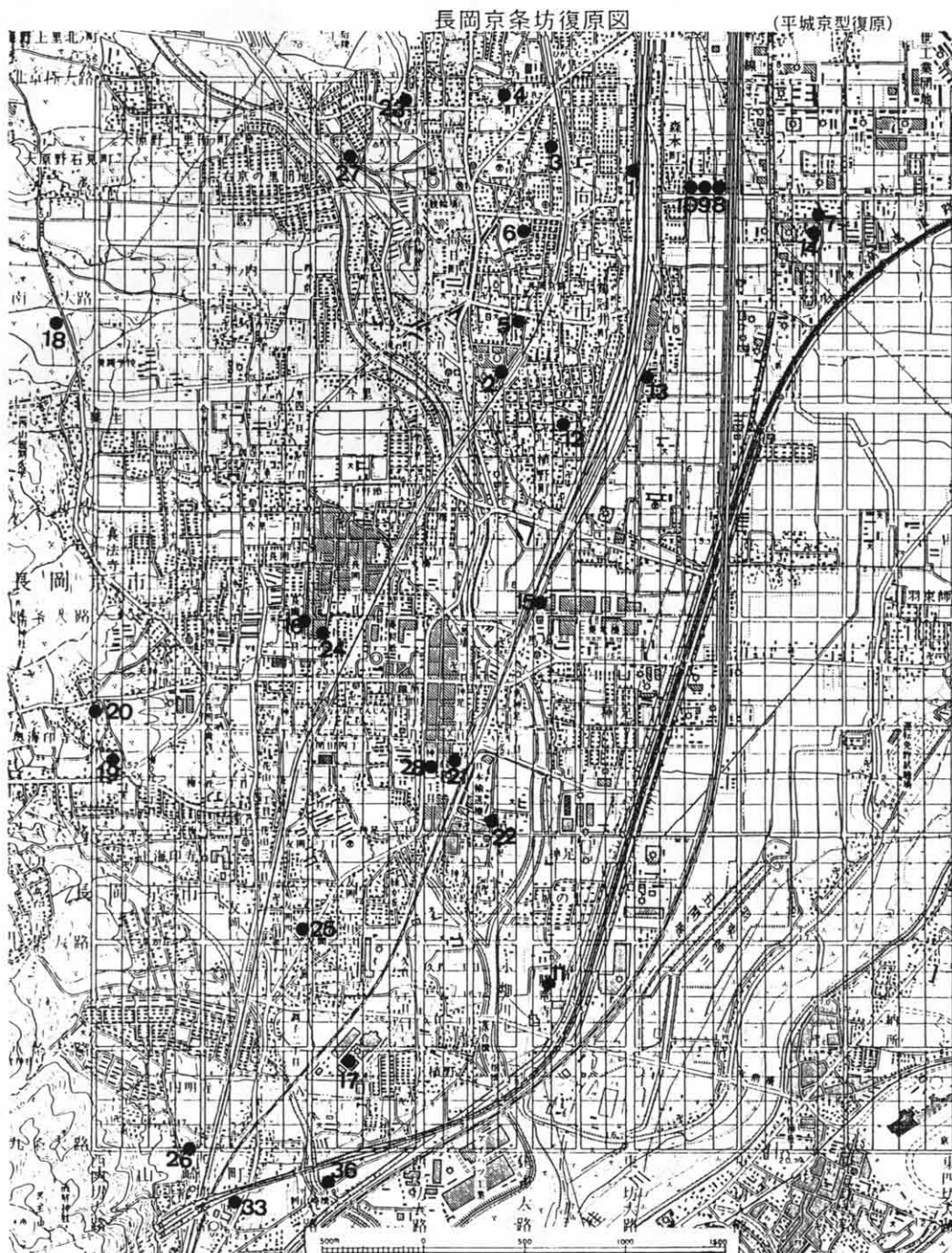
## 長岡京跡調査だより・69

前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成11年2月24日、3月24日、4月27日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内6件、左京域9件、右京域13件であった。京外の8件を併せると36件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。(米本光徳)

調査地一覧表(1999年4月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第373次	7ANDST-5	向日市森本町下森本21-1	(財)向日市埋文	98.12/14~3/31
2	宮内第375次	7ANFOC-9	向日市上植野町御塔道2-2.2-3.3-2.44、上植野町南開13-3.15-1.19-1	(財)向日市埋文	1/11~3/5
3	宮内第376次	7ANEYT-7	向日市寺戸町岸ノ下20-1番地	(財)向日市埋文	3/8~4/16
4	宮内第377次	7ANBHD-3	向日市寺戸町初田6-2	(財)向日市埋文	3/10~3/17
5	宮内第378次	7ANEYT-7	向日市鶏井町山畑21-3	(財)向日市埋文	4/2~4/7
6	宮内第379次	7ANEAC-5	向日市鶏井町荒内35-48	(財)向日市埋文	4/19~4/22
7	左京第418次	7ANVKC-1	京都市南区久世東土川町178他	(財)京都市埋文研	98.6/15~
8	左京第421次 第1調査区	7ANDTD-3	向日市森本町佃22他	(財)向日市埋文	98.11/2~2/末
9	左京第421次 第2調査区	7ANDTD-3	向日市森本町佃22他	(財)向日市埋文	3/9~4/末
10	左京第421次 第3調査区	7ANDTD-3	向日市森本町佃22他	(財)向日市埋文	2/2~4/28
11	左京第423次	7ANQCK-2	長岡京市勝龍寺近竹7-4	(財)長岡京市埋文	1/11~1/25
12	左京第424次	7ANIFJK-8	長岡京市上植野町浄徳8	(財)向日市埋文	2/2~3/17
13	左京第425次	7ANIESK-3	長岡京市鶏井町草田29-3	(財)向日市埋文	4/7~4/26
14	左京第426次	7ANIVKC-2	京都市南区東土川町178他	(財)京都市埋文研	4/15~
15	左京第427次	7ANFJH	向日市上植野定位田15-3.15-5	(財)向日市埋文	4/12~4/23
16	右京第623次	7ANQCK-2	長岡京市勝龍寺近竹7-4	(財)長岡京市埋文	1/11~1/25
17	右京第624次	7ANRUI-3	長岡京市調子3丁目1-1	(財)長岡京市埋文	98.11/4~3/31
18	右京第626次	7ANGKM-1	長岡京市井ノ内鏡山7番地、今里回向場3番地	(財)長岡京市埋文	98.12/7~2/3
19	右京第628次	7ANPTD-3	長岡京市奥海印寺谷田32-1他	(財)長岡京市埋文	1/18~1/25
20	右京第629次	7ANPTM-3	長岡京市奥海印寺太鼓山42他	(財)長岡京市埋文	1/25~2/8
21	右京第630次	7ANMBZ-2	長岡京市神足3丁目地内	(財)長岡京市埋文	1/27~7/24
22	右京第631次	7ANMKI-6	長岡京市神足2丁目7	(財)長岡京市埋文	2/1~3/12
23	右京第632次	7ANBNI-3	向日市寺戸町西垣内15	(財)向日市埋文	2/8~2/22
24	右京第633次	7ANKSN-6	長岡京市長岡2丁目407他	(財)長岡京市埋文	3/15~5/13
25	右京第634次	7ANNMC-4	長岡京市友岡4丁目215-1他	(財)長岡京市埋文	3/23~4/13
26	右京第636次	7ANSKN	大山崎町字円明寺小字香田20.21	大山崎町教委	4/6~4/23
27	右京第637次	7ANBOK-2	向日市寺戸町大牧2	向日市埋文	4/12~6/12
28	右京第638次	7ANMHIK-2	長岡京市神足2丁目地内	長岡京市埋文	4/26~6/24
29	久々相遺跡 第5次	7AKBUU-2	向日市寺戸町瓜生20-1	(財)向日市埋文	1/11~3/5

30	久々相遺跡 第6次	7AKBUU-3	向日市寺戸町瓜生20-1	(財)向日市埋文	3/10~3/31
31	中海道遺跡 第49次		向日市物集町	(財)京都府埋文	98.11/19~1/25
32	大藪遺跡		京都市南区久世殿城町	(財)京都市埋文研	98.7/1~4/16
33	大山崎町第 29次	7YYMSDD-4	大山崎町円明寺小字百々	大山崎町教委	98.10/27~2/18
34	山城国府跡 第53次	7YYMS'CM-5	大山崎町大山崎茶屋前11	大山崎町教委	2/9~2/18
35	山城国府跡 第54次	7XYS'UD-4	大山崎町大山崎上の田11	大山崎町教委	4/1~7/30
36	下植野南遺 跡	IK31	大山崎町下植野門田地内	(財)京都府埋文	98.12/14~2/17



## 追悼

# 堤 圭三郎 理事を偲ぶ

花束を抱え、爽やかな顔の堤理事の写真の載った新聞記事が手元にある。文化財行政一筋35年という見出しがあり、京都府教育庁文化財保護課をご退任された平成8年春の記事である。それからわずか3年で亡くなられようとは誰もが全く予想しなかったことである。堤理事に長くご指導を受けてきた者一同の大きな悲しみとなる出来事であった。

堤理事は教育庁ご退任の直前に手術をされたが、同年4月からは(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター(以下、埋文センター)理事として発掘調査の指導に当たってこられた。以来3年間、昨年の暮れに至るまでは、発掘現場に度々足を運んで指導、助言をいただいた。

また埋文センターの教育職出向職員の研修に積極的に取り組み、昨年11月には丹後・丹波、本年1月には乙訓地方の古墳を教材に教えていただいた。それで私たちも手術の成功と完治を疑わなかったのであった。

しかし1月半ば以降には息苦しい状態があるとのことで、だんだんに現地指導を控えられた。それでもいつもと変わらず穏やかに話しておられたので一時的な不調とばかり周囲のものは思ったのである。3月13日には城陽市で講演をされた。原稿をきちんと準備され時間どおりに話されたとのことで、その熱意と責任感に一同が感銘を受けた。埋文センターにも3月中旬までいつもどおりに来られて、「調査中の写真は脚を立ててもっといいねいに撮るように」と言われたことが耳に新しい。なによりも現地で調査し、それを基に考えることを大事にされ、調査員に注ぐ目は最後まで暖かくまた厳しかった。

堤理事が奈良県、大阪府に次いで全国で3番目の専門の埋蔵文化財担当の技師として京都府に入られたのは昭和36年のことであった。まだ遺跡に対する理解が乏しい当時の社会状況の中で、誰に対しても懇切ていねいに調査の意義を説き、市町村とも協力し、開発との調整を図りながら、府下の埋蔵文化財保護行政の基礎を築かれた。現場に泊まり込んでの調査によって多くの若い技師を育てられた。公共事業の増加で大規模調査が行われるようになると、埋文センターの設立に



城陽市で講演を行う堤 圭三郎理事  
(城陽市歴史民俗資料館提供)



## 付表 堤 圭三郎理事の略歴

1961(昭和36)年 4月 京都府教育庁指導部文化財保護課技師に採用	1971(昭和46)年 6月 文化財保護課主査
1963(昭和38)年 8月～9月 青塚古墳(城陽市)発掘調査	1974(昭和49)年 4月 文化財保護課記念物係長
1964(昭和39)年 5月～10月 坊主山古墳群(宇治市)発掘調査	1981(昭和56)年 4月 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センターに出向、 調査課長に就任
1965(昭和40)年 5月～6月 田坂野古墳群(綾部市)発掘調査	1982(昭和57)年 6月 文化財保護課主幹
1965(昭和40)年 5月～6月 成山古墳(綾部市)発掘調査	1986(昭和61)年 6月 文化財保護課長
1965(昭和40)年 12月 宝蔵山古墳群(福知山市)発掘調査	1991(平成3)年 4月 指導部理事文化財保護課長事務取扱
1965(昭和40)年 8月 愛宕山古墳(加悦町)発掘調査	1996(平成8)年 3月 京都府教育庁を退職
1966(昭和41)年 10月 岩滝丸山古墳(岩滝町)発掘調査	1996(平成8)年 4月 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター指導担当 理事に就任
1968(昭和43)年 8月～1969(昭和44)年 3月 法王寺古墳(岩滝町)発掘調査	

尽力され、昭和56年の発足と共に調査課長としてセンターの若い歩みを指導された。昭和61年からは京都府文化財保護課長として、文化財保護行政の充実に努められ、京都の文化財が世界遺産となったのも堤課長の時代である。

ご退任の直後に、堤理事に感謝する会等が開かれ、『堤圭三郎さんのあゆみ』が発行されたが、堤理事の歩みは京都府の埋蔵文化財保護行政の歩みであり、理事はまさに生き字引的な存在であった。3月末、城陽市史第3巻が刊行され、これが絶筆となってしまったが、調査研究面でもこれから執筆していただきたいことが沢山あった。まだまだご指導をいただき、文化財保護の初心に帰って調査と保護に取り組むために、本当に大事な先輩を失ったのである。堤理事のあの温顔は、深く私達の脳裏に刻まれている。そして文化財をかけがえのないものとする理事の、不易の心と情熱を受け継いで行きたいとの思いで一杯である。今は種々の重責から解放された理事に、ゆっくりお休みいただきたいと念じている。合掌。

(杉原和雄＝京都府立山城郷土資料館館長)

(安藤信策＝京都府立山城郷土資料館主幹)

## 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

(平成11年4月1日現在)

### 理事長

樋口 隆康

(京都府文化財保護審議会会長・京都大学名誉教授)

### 副理事長

中澤 圭二

(京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授)

### 常務理事

木村 英男

### 理事

川上 貢

(京都府文化財保護審議会会長職務代理・

京都大学名誉教授)

上田 正昭

(京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授)

藤井 学

(奈良大学文学部教授・京都府立大学名誉教授)

佐原 眞

(国立歴史民俗博物館館長)

足利 健亮

(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

都出比呂志

(大阪大学文学部教授)

井上 満郎

(京都産業大学法学部教授)

堤 圭三郎

中村 彰

(京都府府民労働部文化芸術室長)

土山 喜英

(京都府教育庁指導部長)

中谷 雅治

(京都府教育庁指導部文化財保護課長)

### 監事

小林 真一

(京都府出納管理局長)

京極 隆夫

(京都府監査委員事務局長)

事務局長 木村 英男

事務局次長 福嶋 利範

総務課 課 長

主 幹

総務係長

主 任

主 事

主査調査員

調 査 課 長

企 画 係 長

主査調査員

資 料 係 長

主任調査員

調 査 員

調 査 課 長

主 幹

課長補佐

調査第1係長

主任調査員

主査調査員

調 査 員

調査第2係長

主任調査員

主査調査員

調 査 員

調査第3係長

主任調査員

調 査 員

調査第4係長

主任調査員

調 査 員

福嶋 利範(兼)

安田 正人

安田 正人(事務取扱)

杉江 昌乃

今村 正寿 鍋田 幸世

岡田 正記 西林 紀子

橋本 清一

(府立山城郷土資料館へ派遣)

小山 雅人

伊野 近富

米本 光徳

小山 雅人(事務取扱)

田中 彰

森下 衛 河野 一隆

平良 泰久

久保 哲正

奥村清一郎 水谷 壽克

水谷 壽克(兼)

引原 茂治

石尾 政信 黒坪 一樹

石崎 善久 村田 和弘

福島 孝行

久保 哲正(事務取扱)

戸原 和人 増田 孝彦

竹井 治雄 岡崎 研一

田代 弘 中川 和哉

筒井 崇史

辻本 和美

竹原 一彦 岩松 保

森島 康雄 中村 周平

柴 暁彦 野々口陽子

奥村清一郎(兼)

松井 忠春 石井 清司

小池 寛

伊賀 高弘 野島 永

藤井 整 松尾 史子

センターの動向(99.2～4)

1. できごと

- 1.28～2.3 奈良国立文化財研究所特別研修  
「近世城郭調査課程」戸原和人主任調  
査員参加
2. 2 井上満郎理事、森垣外遺跡(精華町)  
現地視察
- 3 教育関係法人職員合同研修会(於：  
山城高校・ルビノ京都堀川)
- 8 太田遺跡(亀岡市)発掘調査終了  
(10.26～)
- 9 木村英男常務理事・事務局長、市  
田斉当坊遺跡(久御山町)現地視察
- 15 職員研修(於：当センター)講師：  
井上満郎理事「風水思想と日本の宮  
都」
- 16 企業内同和問題啓発推進員研修会  
(於：京都会館)、安藤信策次長出席  
井上満郎理事、平安京跡(二条大  
路)現地視察  
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近  
畿ブロック主催者会議(於：大阪府文  
化財調査研究センター)、伊野近富企  
画係長出席
- 17 都出比呂志理事、市田斉当坊遺跡・  
木津城山遺跡(木津町)現地視察  
教育職出向職員研修「乙訓地域の遺  
跡」、講師：堤圭三郎理事、米本光  
徳・竹下士郎主査調査員、中村周平  
調査員受講
- 18 人権に関する職場研修(於：乙訓総  
合庁舎)奥村清一郎調査第4係長出席  
芝山遺跡(城陽市)現地調査終了  
(12.9～)
- 19 森垣外遺跡、現地説明会  
長岡宮跡第372次調査、発掘調査終  
了(1.6～)
- 20 第84回埋蔵文化財セミナー(別掲)
- 23 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近  
畿ブロック会議(於：大阪市)木村英  
男常務理事・事務局長、福嶋利範次  
長、安田正人主幹出席  
足利健亮理事、市田斉当坊遺跡・  
平安京跡(二条大路)現地視察  
木津城山遺跡、現地説明会
- 24 時事・人権問題研修(於：府職員研  
修所)安田正人主幹出席  
長岡京連絡協議会
- 25 市田斉当坊遺跡、現地説明会  
下植野南遺跡(大山崎町)発掘調査  
終了(4.13～)  
森垣外遺跡発掘調査終了(6.16～)  
木津城山遺跡発掘調査終了(11.11  
～)
3. 1 時事・人権問題研修(於：京都商工  
会議所)水谷課長補佐出席  
JICA文化財修復整備技術コース帰  
国研修員フォローアップ調査団報告  
会(於：京都市)小山雅人調査第1課  
長出席
- 2 池上遺跡(八木町)、関係者説明会
- 3 川上 貢理事、平安京跡(二条大路)  
現地視察
- 4 中澤副理事長、市田斉当坊遺跡現  
地視察

- 5 都出比呂志理事、池上遺跡現地視察  
池上遺跡、発掘調査終了(10.27～)  
今井城跡・今井古墳(峰山町)、発掘調査終了(12.15～)
- 11 JICA文化財修復整備技術コース、カントリー・レポート発表会(於：京都市)小山雅人調査第1課長出席
- 12 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：滋賀県)河野一隆・松尾史子各調査員出席  
平安京跡(二条大路)発掘調査終了(12.11～)  
平安京跡(右京一条三坊九・十町、京都市北区)発掘調査終了(10.7～)  
市田斉当坊遺跡発掘調査終了(9.21～)
- 16 職員研修(於：当センター)講師：中川和哉・野島 永・石崎善久・河野一隆各調査員「全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック海外研修報告・中国四川省」
- 19 JICA文化財修復整備技術コース、当センターで基礎講座(埋蔵文化財)
- 24 第55回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、川上 貢、藤井 学、都出比呂志、井上満郎、西山隆史、中谷雅治理事出席  
長岡京連絡協議会
- 31 退職職員辞令交付(別掲)
4. 1 新規採用職員辞令交付(別掲)
- 2 堤 圭三郎理事御逝去
- 9 平安京跡(二条大路：京都市中京区)

現地説明会

- 12 下植野南遺跡(大山崎町)発掘調査開始  
教育庁新規採用職員研修受入れ
- 19 平安京跡(右京一条三坊九・十町：京都市北区)発掘調査開始
- 27 長岡京連絡協議会

## 2. 普及啓発事業

- 2.20 第84回埋蔵文化財セミナー開催(於：大山崎ふるさとセンター)都への道－岩松 保主任調査員「都への道－奈良・平安時代の乙訓の道－」、古閑正浩大山崎町教育委員会主事「山陽道周辺部の調査」、石井清司主任調査員「下植野南遺跡の発掘調査について」

## 3. 人事異動

- 3.31 西山隆史理事、安井恒夫監事退任  
安藤信策事務局次長退職(京都府立山城郷土資料館へ)、竹下士郎主査調査員退職(向日ヶ丘養護学校へ)
4. 1 土山喜英理事、小林真一監事就任。  
理事長をはじめ他の理事・監事は再任  
久保哲正調査第2課主幹調査第2係長事務取扱採用(京都府立山城郷土資料館から)

(小山雅人)

## 受贈図書一覧(11.2~4)

## 北上市立埋蔵文化財センター

北上市文化財調査報告第60集 滝ノ沢遺跡Ⅱ、同第61集 滝ノ沢遺跡Ⅲ、北上市埋蔵文化財調査報告第12集 北上遺跡群、同第14集 蟹沢館遺跡発掘調査概報、同第17集 金成遺跡Ⅰ、同第19集 北上遺跡群、同第20集 横欠遺跡、同第21集 横町遺跡発掘調査概報、同第22集 金成遺跡Ⅱ、同第23集 北上遺跡群、同第24集 蒼前森遺跡、同第25集 樺山遺跡、同第30集 横欠遺跡、北上市埋蔵文化財年報1991、同1993~1995年度

## (財)山形県埋蔵文化財センター

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第51集 富山遺跡発掘調査報告書、同第52集 平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書、同第53集 山居遺跡発掘調査報告書、同第54集 昭和新田遺跡発掘調査報告書、同第56集 北目長田遺跡第3次発掘調査報告書、同第58集 漆山長表遺跡発掘調査報告書、同第59集 植木場一遺跡発掘調査報告書、同第60集 東北自動車道相馬・尾花沢線関係予備調査報告書1、年報平成9年度

## (財)いわき市教育文化事業団

平窪諸荷遺跡、研究紀要10、年報9

## (財)茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第138集 八丁台遺跡、同第139集 中谷津遺跡、同第140集 木工台遺跡1、同第141集 宮ヶ崎城跡、同第142集 高須賀中台遺跡、同第143集 東原遺跡・前畑遺跡・柏原遺跡、同第144集 実穀古墳群・実穀寺子遺跡1、同第145集 下り松遺跡・油井遺跡、同第146集 前田村遺跡G・H・I区、同第147集 前田村遺跡J・K区、同第148集 坂遺跡・船戸内遺跡・小原遺跡、同第149集 熊の前遺跡、同第150集 寺山遺跡・東平遺跡・坂ノ上塚群、同第151集 実穀寺子遺跡2

## (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県遺跡大事典、研究紀要15、年報17、古墳時代の土器、創立20周年記念 公開考古学講座、ヒストリア榛名一暮らしがみえる・心がわかる一、ヒストリア榛名、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第221集 白倉下原・天引向原遺跡Ⅳ、同第222集 白倉下原・天引向原遺跡Ⅴ、同第237集 行沢大竹遺跡、同第245集 冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金古北十三町遺跡、同第247集 宿横手三波川遺跡、同第253集 井野屋敷前遺跡

## (財)千葉県文化財センター

千葉県文化財センター調査報告書第317集 笹目沢遺跡・種が谷津遺跡・大道遺跡、同第318集 白井町一本桜南遺跡、同第319集 下総町名木大

台遺跡、同第320集 古宿・上谷遺跡、同第321集 干潟工業団地埋蔵文化財調査報告書、同第322集 市原市武士遺跡2、同第323集 袖ヶ浦市荒久(2)遺跡、同第324集 有吉北貝塚1、同第325集 有吉北貝塚、同第326集 柏市光ヶ丘遺跡、同第327集 佐倉市佐倉城跡、同第328集 八千代市島田込ノ内遺跡、同第329集 沼南町道堀遺跡・薙遺跡、同第330集 山武町栗焼棒遺跡、同第331集 東金市大谷台遺跡他18遺跡、同第332集 東金市道庭遺跡、同第333集 松尾町名城遺跡、同第334集 佐原市多田新田遺跡、同第335集 市原市海保野口遺跡、同第336集 市原市今福遺跡、同第337集 木更津市菅生遺跡・祝崎古墳群、同第338集 富山町大峰畑遺跡・要害山城跡・高橋遺跡、同第339集 富津市川島遺跡、同第340集 袖ヶ浦市豆作台遺跡、同第341集 船橋・我孫子バイパス線建設埋蔵文化財調査報告書、同第342集 東金市油井吉塚原遺跡、年報No.23

## (財)山武郡市文化財センター

(財)山武郡市文化財センター発掘調査報告書第32集 山田新田Ⅱ遺跡、同第36集 上岩ノ谷遺跡、同第44集 谷台遺跡、同第51集 小野遺跡F区、同第52集 京寺遺跡、同第53集 小泉遺跡B地区、年報No.12~14

## (財)印旛郡市文化財センター

(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第93集 六崎貴舟台遺跡発掘調査報告書、同第131集 宗吾内野台畑遺跡、同第144集 太田長作遺跡、同第146集 山王台遺跡、同第148集 間野台貝塚、同第149集 天王前遺跡、同第150集 ちほろく遺跡、同第155集 六貴舟台遺跡

## (財)市原市文化財センター

年報 平成6年度、同平成7年度、(財)市原市文化財センター調査報告書第35集 白船城跡Ⅱ、同第41集 郡本大宮遺跡、同第58集 姉崎六孫王原遺跡、同第59集 新生荻原野遺跡、同第61集 郡本遺跡、同第62集 中高根南名山遺跡、同第63集 市原城郭跡、第13回市原市文化財センター遺跡発表会要旨

## (財)東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター調査報告第50集 多摩ニュータウン遺跡、同第61集 多摩ニュータウン遺跡、同第62集 多摩ニュータウン遺跡、同第64集 多摩ニュータウン遺跡、同第65集 多摩ニュータウン遺跡、同第66集 多摩ニュータウン遺跡、同第69集 多摩ニュータウン遺跡

## (財)かながわ考古学財団

かながわ考古学財団調査報告44 池子遺跡群Ⅷ、同56 上粕屋・上宿遺跡・上粕屋・メ引北

遺跡・上粕屋・メ引西遺跡、同57 神戸・上宿遺跡、研究紀要4 かながわの考古学  
(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター  
中ノ宮北遺跡発掘調査報告書、小丸遺跡、牢尻台遺跡発掘調査報告  
(財)山梨文化財研究所  
遺跡・遺物から何を讀みとるか(Ⅱ)  
長野県埋蔵文化財センター  
長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36  
上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5、  
同42 上信越自動車埋蔵文化財発掘調査報告書26  
富山県埋蔵文化財センター  
小杉流通業務団地遺跡群第14次発掘調査概要、  
任海宮田遺跡発掘調査報告書、同Ⅱ、同Ⅲ、年報  
平成7年度、同平成8年度、年報 20年の歩み  
(財)岐阜県文化財保護センター  
岐阜県文化財保護センター調査報告書第26集  
荒尾南遺跡、同第39集 牧野小山遺跡C地点、  
同第44集 牛垣内遺跡、同第45集 丸山遺跡、  
同第48集 諸洞遺跡・大坪遺跡、同第49集 ホヤノ木古墳、  
同第50集 土岐口西山古窯跡、同第53集 細野遺跡・梨子谷遺跡・千日遺跡・宮上遺跡  
各務原市埋蔵文化財調査センター  
各務原市文化財調査報告第24号 前渡猿尾堤第3調査区発掘調査報告書、同第25号 三ツ塚遺跡A地区発掘調査報告書  
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター  
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第21集  
上品野蟹川遺跡Ⅱ、研究紀要 第7輯  
大津市埋蔵文化財調査センター  
大津市埋蔵文化財調査報告書28 南滋賀遺跡発掘調査報告書Ⅱ  
(財)大阪府文化財調査研究センター  
池島・福万寺遺跡発掘調査概要XV、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第11集  
余部遺跡、同第12集 深井清水町遺跡、同第13集 土井の木遺跡、同第21集 加治・神前・畠中遺跡Ⅱ、同第23集 田井中遺跡・志紀遺跡、  
同第27集 大庭寺・伏尾遺跡、同第38集 庄田遺跡、第38回大阪府埋蔵文化財研究会資料集  
(財)大阪市文化財協会  
堂島蔵屋敷跡、長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ  
桜井市立埋蔵文化財センター  
桜井の弥生時代  
倉敷埋蔵文化財センター  
年報5 平成9(1997)年度、倉敷埋蔵文化財発掘調査報告第8集 船倉貝塚  
(財)香川県埋蔵文化財調査センター  
ふるさと歴史見つけた!、国分寺下日名代遺跡、  
中間西井坪遺跡Ⅱ、多肥松林遺跡  
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター  
埋蔵文化財発掘調査報告書第66集 湯築城跡、

同第73集 糸山5号土坑墓・糸山ミカン谷遺跡・姫内城跡11次、同第74集 中駄場遺跡  
福岡市埋蔵文化財センター  
平成9年度 年報第17号  
(財)嶺南埋蔵文化財研究院  
嶺南埋蔵文化財研究院學術調査報告第1冊 金泉市文化遺蹟地表調査報告書、同第2冊 慶州市文化遺蹟地表調査報告書、同第3冊 高靈快賓洞古墳群、同第4冊 八公山址地蔵寺、同第6冊 大邱旭水洞生活遺蹟、同第7冊 慶山埋蔵文化財地表調査報告書、同第8冊 中央高速道路建設予定地域内文化遺蹟発掘調査報告書、同第9冊 宜寧泉谷里古墳群Ⅰ、同第10冊 宜寧泉谷里古墳群Ⅱ、同第11冊 慶州皇吾洞330番地建物址遺蹟、同第12冊 大邱竹田洞墳墓群、同第13冊 高靈池山30号墳、同第14冊 浦項玉城里古墳群Ⅰ・Ⅱ  
小樽市教育委員会  
小樽市埋蔵文化財調査報告書第17集 塩谷6遺跡、忍路環状列石  
仁木町教育委員会  
仁木町埋蔵文化財調査報告書第2集 モンガクB遺跡Ⅱ  
白老町教育委員会  
ボンアヨロ4遺跡発掘調査概要報告書  
郡山市教育委員会  
野中遺跡第2次・山田C遺跡第2次・仁戸内館跡、高倉栗遺跡、一ツ松遺跡、清水内遺跡5区、阿良久遺跡2区、阿良久遺跡2・3区、天神南遺跡、山王林南遺跡、荒井猫田遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区、大安場古墳群第2次、郡山館跡第1次、蒲倉古墳群55・56・57号墳、蒲倉古墳群測量調査・補足調査報告、郡山市埋蔵文化財分布調査報告5、きらめく歴史の流れ、阿尺歴史紀行  
栃木県教育委員会  
栃木県埋蔵文化財調査報告第171集 槻沢遺跡Ⅲ、同第174集 越名西遺跡・越名河岸跡、同第196集 浄法寺跡、同第207集 寺野東遺跡Ⅰ、同第208集 寺野東遺跡Ⅳ、同第212集 雨ヶ谷宮遺跡・雨ヶ谷西坪遺跡、同第214集 新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡、同第218集 清六Ⅲ遺跡Ⅱ  
高崎市教育委員会  
高崎市文化財調査報告書第108集 上並榎御料所遺跡、同第110集 下並榎下松遺跡、同第154集 高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書12、同第155集 高崎市遺跡分布地図、同第156集 若田屋敷裏Ⅰ・Ⅱ遺跡、同第158集 平成9年度 高崎市内小規模埋蔵文化財発掘調査2、同第159集 下中居条里遺跡Ⅱ、高崎市遺跡調査会文化財報告書第58集 引間Ⅴ遺跡、同第69集 飯塚新田西Ⅱ遺跡、同第70集 上中居西屋敷Ⅲ遺跡、同第71集 八幡二子塚遺跡、同第72集 剣崎稻荷塚遺跡、同第74集 山名柳沢遺跡

- 東金市教育委員会  
平成10年度 東金市内遺跡発掘調査報告書
- 東京都北区教育委員会  
北区埋蔵文化財調査報告第25集 豊島馬場遺跡Ⅱ
- 日野市教育委員会  
日野市埋蔵文化財発掘調査報告51 七ツ塚遺跡2、同52 南広間地遺跡10、同53 南広間地遺跡11、同54 南広間地遺跡12、同59 日野市埋蔵文化財発掘調査輯報X、南広間地遺跡第45次調査
- 武蔵野市教育委員会  
吉祥寺南町1丁目遺跡J地点、平成10年度 武蔵野市埋蔵文化財調査報告書3
- 伊那市教育委員会  
伊那市内の民俗芸能(無形文化財)の記録第4集、金鑄場遺跡、富岡遺跡
- 小松市教育委員会  
額見町遺跡
- 福井市教育委員会  
安田城山前遺跡・細坂遺跡・北堀貝塚、開発遺跡・高柳遺跡・石盛遺跡、今市遺跡、和田神明遺跡
- 池田町教育委員会  
願成寺西墳之越古墳群資料調査報告書
- 掛川市教育委員会  
平成5年度 掛川市埋蔵文化財発掘調査年報、高田遺跡、女高I遺跡、新田横穴群D群、岡津原Ⅲ遺跡、前坪古墳群
- 三島市教育委員会  
初音ヶ原遺跡群Ⅲ、初音ヶ原遺跡
- 菊川町教育委員会  
横地城南遺跡群発掘調査報告書
- 吉良町教育委員会  
善光寺沢遺跡発掘調査報告書
- 長久手町教育委員会  
三ヶ峯小窯発掘調査報告書
- 安濃町教育委員会  
安濃町埋蔵文化財調査報告15 太田城跡発掘調査報告書
- 大阪市教育委員会  
大阪の歴史と文化財 第2号
- 三田市教育委員会  
日本の青磁 三田の青磁
- 赤穂市教育委員会  
赤穂市文化財調査報告書16 周成・入相遺跡発掘調査報告書Ⅳ
- 西紀・丹南町教育委員会  
西紀町の石造物、丹南町の石造物
- 八鹿町教育委員会  
八鹿町ふるさとシリーズ第12集 よみがえる八木城跡、八鹿町文化財調査報告書第14集 七面山古墳群・数田北遺跡
- 大和郡山市教育委員会  
大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 美濃庄遺跡、大和郡山市文化財調査概要38 郡
- 山城下町・紺屋町・新紺屋町地区発掘調査報告書、第4回こおりやま歴史フォーラム
- 広陵町教育委員会  
広陵町指定文化財 平成9年度版
- 榛原町教育委員会  
榛原町内遺跡発掘調査概要報告書1996年度、宇陀の民俗ことば
- 北条町教育委員会  
北条町埋蔵文化財報告書28 町内遺跡発掘調査報告書第8集
- 出雲市教育委員会  
古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書
- 笠岡市教育委員会  
笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告4 御尊堂遺跡
- 御津町教育委員会  
御津町埋蔵文化財発掘調査報告9 鍛冶屋谷遺跡
- 山口市教育委員会  
山口市埋蔵文化財調査報告第54・55集 寺内遺跡Ⅱ・七尾山古墳、同第68集 山口市内遺跡詳細分布調査
- 香川県教育委員会  
香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度、同平成9年度、埋蔵文化財試掘調査報告XⅠ 香川県内遺跡発掘調査事業、香川県中世城跡詳細分布調査概報 平成9年度、千町遺跡発掘調査報告書、旧練兵場遺跡Ⅳ
- 南国市教育委員会  
南国市埋蔵文化財報告書第15集 岩村遺跡発掘調査概報、同第16集 岩村遺跡群Ⅱ、同第17集 白猪田遺跡
- 宗像市教育委員会  
名残Ⅰ 宗像市文化財調査報告書第18集、朝町山ノ口Ⅱ 同第34集、浦谷古墳群Ⅲ 同第36集、光岡辻ノ園 同第43集
- 甘木市教育委員会  
甘木市文化財調査報告書第40集 頓田高見遺跡Ⅰ、同第41集 下淵名子古墳群、同第42集 下浦宮原遺跡Ⅱ、同第43集 頓田高見遺跡Ⅱ、同第44集 頓田高見遺跡Ⅲ・栗山遺跡Ⅳ、同第45集 屋永西原遺跡Ⅱ、同第46集 甘木ミノケ遺跡、同第47集 堤蓮町遺跡、甘木歴史資料館報第1集
- 大刀洗町教育委員会  
大刀洗町文化財調査報告書第13集 本郷野開遺跡Ⅱ、同第15集 本郷野開遺跡Ⅲ・Ⅳ、同第17集 高樋塚添遺跡Ⅱ
- 築城町教育委員会  
船迫窯跡群 築城町文化財調査報告書第6集
- 北野町教育委員会  
仁王丸遺跡 北野町文化財調査報告書第10集、良積遺跡Ⅱ 同第11集
- 西彼町教育委員会  
西彼町文化財調査報告書第1集 下茅場遺跡
- 都城市教育委員会  
都城市文化財調査報告書第23集 天神原遺跡、

- 同第25集 久玉遺跡第5次発掘調査・油田遺跡・正坂原遺跡、同第35集 加治屋遺跡、同第37集 大浦遺跡、同第38集 田谷・尻枝遺跡、同第41集 都城市中央東部地区史跡・旧街路等調査報告書
- えびの市教育委員会**  
えびの市埋蔵文化財調査報告書第23集 昌明寺遺跡
- 串間市教育委員会**  
串間市文化財調査報告書第19集 市内遺跡発掘調査報告書
- 岩手県立博物館**  
収蔵資料目録第14集 考古Ⅳ、研究報告 第15、16号
- 大阪府立弥生文化博物館**  
渡来人登場
- 大阪府立近つ飛鳥博物館**  
修羅!
- 東北歴史資料館**  
研究紀要 第24、25巻
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場**  
焼き物にみる中世の世界、神田遺跡、三夜原東遺跡・新堀東遺跡・壺杯清水西遺跡、前谷遺跡群・東原観音塚、六十塚遺跡
- 栃木県立博物館**  
栃木県立博物館研究報告書 栃木県の仏像
- 浦和市立郷土博物館**  
浦和市博物館研究調査報告書 第26集
- 流山市立博物館**  
年報 No.20
- 国立歴史民俗博物館**  
研究報告 第78集、研究年報 6
- 出光美術館**  
館報 第105、106号
- 神奈川県立歴史博物館**  
年報 平成6～9年度
- 長野県立歴史館**  
研究紀要第5号
- 富山市考古資料館**  
紀要 第19、18号
- 氷見市立博物館**  
氷見の漁業と漁村のくらし
- 高岡市立博物館**  
年報 第12号
- 石川県立歴史博物館**  
紀要 第12号、紀尾井町事件
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館**  
一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅵ、平成8年度発掘調査環境整備事業概要27、平成9年度発掘調査環境整備事業概要29、紀要 1996
- 土岐市美濃陶磁歴史館**  
織部 御深井 古染付
- 浜松市博物館**  
貴見寺東遺跡、千客万来のアイディア、川の前遺跡Ⅱ
- 豊橋市郷土資料館**  
豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 中川原遺跡発掘調査報告書、同第13集 花本遺跡、同第14集 千石遺跡
- 斎宮歴史博物館**  
館蔵名品展
- 滋賀県立琵琶湖博物館**  
絶滅と進化
- 大阪人権博物館**  
紀要 第2号
- 八尾市立歴史民俗資料館**  
木綿—その用と美—
- 岸和田市立郷土資料館**  
小川翠村
- 吹田市立博物館**  
北摂古寺巡礼
- 兵庫県立歴史博物館**  
収蔵資料目録6 山口コレクション
- 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館**  
幻のおおでら—百濟大寺
- 檀原市千塚資料館**  
かしはらの歴史をさぐる6
- 香芝市二上山博物館**  
高山火葬墓・高山石切場遺跡
- 広島県立歴史博物館**  
戦国の城下町、草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋
- 藤山歴史資料館**  
四国 山本雲溪展
- 福岡市博物館**  
平成7年度収集 収蔵品目録13、年報5、研究紀要 第8号
- 九州歴史資料館**  
年報 平成9年度、研究論集23
- 佐賀県立博物館**  
佐賀県立博物館所蔵品目録(民俗)、同(歴史・美術Ⅰ)、同(考古)、同(動物資料・地質資料・模型類)
- 佐賀県立九州陶磁文化館**  
年報 平成8年度、同平成9年度
- 国立中央博物館**  
ガラス乾板目録集Ⅱ
- 東北学院大学学術研究会**  
東北学院大学論集—歴史学・地理学—第31号
- 山形史学会**  
山形大学史学論集 第19号
- 立教大学学芸員課程**  
MOUSEION 44
- 東海大学史学会**  
東海史學 第33号
- 愛知大学文学部史学科**  
愛大史学—日本史・アジア史・地理学—第8号
- 愛知学院大学文学会**  
文学部紀要第28号
- 名古屋大学年代測定資料研究センター**



名古屋大学加速器質量分析計業績報告書X  
 三重大学教育学部  
 ふびと 第47～51号  
 大阪大学文学部  
 待兼山論叢 第32号  
 大手前女子大学  
 大手前女子大学論集 第32号  
 関西学院大学文学部史学科  
 関西学院史学 第26号  
 奈良大学図書館  
 紀要 第27号  
 帝塚山大学考古学研究所  
 研究報告I  
 天理大学附属天理参考館  
 松野照武氏旧蔵資料目録3  
 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
 岡山大学構内遺跡調査研究年報15 1997年度  
 慶尚大學校博物館  
 慶尚大學校博物館研究叢書第18輯 泗川月城里古墳群、同第19輯 陝川玉田古墳群Ⅶ

宮城県多賀城跡調査研究所  
 年報1997、多賀城関連遺跡発掘調査報告書第21冊 桃生城跡Ⅳ、同第23冊 桃生城跡Ⅵ、同第24冊 桃生城跡Ⅶ  
 山武考古学研究所  
 年報 No.16  
 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会  
 千駄ヶ谷五丁目遺跡の諸問題  
 葛飾区遺跡調査会  
 平成9年度 葛飾区埋蔵文化財調査年報、葛飾区遺跡調査会調査報告第44集 柴又帝釈天遺跡Ⅸ  
 台東区文化財調査会  
 上野忍岡遺跡群 台東区埋蔵文化財発掘調査報告書第4集  
 板橋区四葉遺跡調査会  
 板橋区四葉遺跡調査報告書Ⅵ 四葉地区遺跡平成9年度  
 都内第二遺跡調査会  
 西台後藤田遺跡第1地点発掘調査報告書  
 宮ヶ谷戸遺跡調査団  
 東京都あきる野市 宮ヶ谷戸遺跡Ⅲ  
 西国分寺遺跡調査会  
 日影山遺跡・東山道武蔵路  
 宮内庁書陵部  
 書陵部紀要 第50号  
 (財)韓国文化研究振興財団  
 青丘学術論集 第14集  
 (有)朋文出版  
 日本史学文献目録1996(平成8)年版  
 (株)草思社  
 京都千二百年(下)  
 (株)小学館  
 京都の魔界を行く  
 (株)東京堂出版

邪馬台国を知る事典  
 玉川文化財研究所  
 寸嵐二号遺跡発掘調査報告書、蒲野日影坂上遺跡発掘調査報告書、山王平遺跡発掘調査報告書、No.61遺跡発掘調査報告書、恩名大原遺跡発掘調査報告書、御屋敷添遺跡第1地点発掘調査報告書  
 遺跡調査団  
 松本大久保台遺跡  
 遺跡発掘調査団  
 岩井戸横穴墓群発掘調査報告書、平塚市No.86根岸B遺跡発掘調査報告書  
 新津市遺跡調査室  
 金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅲ  
 浜松市埋蔵文化財調査事務所  
 山の神遺跡発掘調査報告書、西畑屋遺跡発掘調査報告書  
 ニッポングラフ新聞社  
 月刊上下水道 3、4月号  
 (財)古代学協会  
 古代文化 第51巻第1～3号  
 狭山池調査事務所  
 狭山池 埋蔵文化財編  
 名神高速道路内遺跡調査会  
 名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第7輯 中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う太田遺跡発掘調査報告書  
 大阪国際センター  
 平成10年度 帰国研修員フォローアップ調査団報告書  
 六甲山麓遺跡調査会  
 堺市 下田遺跡、廿日市市教育委員会発掘調査報告書第2集 廿日市町屋跡2  
 古代文化調査会  
 伏見奉行所発掘調査報告Ⅱ、平安京右京六条三坊  
 奈良国立文化財研究所  
 奈良国立文化財研究所学報第57冊 日本の信仰遺跡、古代の稲倉と村落・郷里の支配、生産遺跡調査課程  
 奈良県立橿原考古学研究所  
 奈良県文化財調査報告書第59集 保津・宮古遺跡第4次発掘調査報告、同第73集 福ヶ谷遺跡・白川火葬墓群、同第76集 平城京左京三条三坊八坪、同第77集 小山戸城跡、同第79集 平城京右京二条二坊七・八・九・十坪、同第82集 越部古墳、奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第70冊 石榴垣内遺跡、王寺町文化財調査報告第1集 畠田古墳、高取町文化財調査報告書第17冊 タニグチ古墳群発掘調査報告、酒ノ免遺跡の研究、末永雅雄先生旧蔵図書目録 補遺、奈良県立橿原考古学研究所年報23 平成8年度、奈良県遺跡調査概報1996年度、黒塚古墳リーフレット第5号、奈良県立橿原考古学研究所1935～1998  
 朝鮮学会

朝鮮学報 第169、170輯  
宮内庁正倉院事務所  
正倉院紀要 第21号  
岡山県古代吉備文化財センター  
下湯原B遺跡・山形福田遺跡・津島遺跡・福見口遺跡、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136 且山遺跡・惣台遺跡・野辺張遺跡ほか、同137 津島遺跡1、同138 加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡、同139 原尾島遺跡、同140 田益田中(笹ヶ瀬川調節池)遺跡、同141 田益田中(国立岡山病院)遺跡、同142 津寺三本木遺跡・津寺一軒屋遺跡、同143 立田遺跡2・高松原古才遺跡・加茂政所遺跡2・津島遺跡6、同144 大成山たたら遺跡群、同145 津島遺跡、同146 小松遺跡ほか、津島遺跡を探る  
中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財発掘調査委員会  
岡山城二の丸跡  
  
(財)京都市埋蔵文化財研究所  
南ノ庄田瓦窯跡 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第18冊  
(財)長岡京市埋蔵文化財センター  
長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第13集、同第14集  
京都市文化市民局  
京都市の文化財(第16集)  
宮津市教育委員会  
宮津市史 史料編第三卷  
八幡市教育委員会  
八幡市埋蔵文化財発掘調査概報 第24集  
京都国立博物館  
平成9年度 年報  
京都府京都文化博物館  
京の江戸時代  
京都府立丹後郷土資料館  
造営にこめる願い  
京都市歴史資料館  
年報No.16  
亀岡市文化資料館  
昔の遊びの風景、昔の子どもの遊び  
大山崎町歴史資料館  
館報 第5号  
宇治市歴史資料館  
宇治文庫10 緑茶の時代  
城陽市歴史民俗資料館  
クヌギくんの発掘たんけん、館報 第4号、城陽市史 第三卷  
佛教大学総合研究所  
紀要 第6号、現代社会における人間観の探求、浄土教の総合的研究  
佛教大学  
佛教大学園部校地の遺跡  
立命館大学文学部  
立命館大学文学部学芸員課程研究報告第8冊  
大仰遺跡発掘調査概報I

京都橘女子大学  
研究紀要 第25号  
京都大学埋蔵文化財研究センター  
京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度  
同志社大学考古学研究室  
同志社大学文学部考古学調査報告第10冊 加茂谷川岩陰遺跡群  
京都府立亀岡高等学校  
久遠の知 第2集  
口丹波史談会  
口丹波史料6-4 鹽魚庭落葉  
  
穴沢咏光  
史峰 第25号  
岩松 保  
思い出の待兼山  
岡村秀典  
三角縁神獸鏡の時代  
河野一隆  
下山横穴墓発掘調査報告書(Ⅱ) 京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第16集、平成10年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料、天理市埋蔵文化財調査概報 柳本遺跡群、天理市埋蔵文化財調査概報 平成6・7年度  
小山雅人  
月刊文化財 発掘出土情報 通巻19号  
近藤 広  
栗東町 新考古学事情  
寒川 旭  
別冊歴史読本 日本古代史 王城と都市の最前線  
筒井崇史  
香川の塩業の歩み  
樋口隆康  
オオヤマトの古墳と王権、奈良県立橿原考古学研究所1935~1998、大黄河文明展  
森島康雄  
姫野々城跡Ⅱ、条里制古代都市研究 通巻14号、築城と攻城戦の天才 秀吉の城と戦略

## 編集後記

情報72号が完成しましたので、お届けします。

目にも鮮やかな新緑の候となり、新年度体制も軌道にのってきました。平成10年度の発掘調査を振り返ると、当センターでは弥生時代遺跡の成果が目立ったものがあります。特に市田齊当坊遺跡は、旧巨椋池畔で見つかった弥生時代の一大拠点集落で、多くの成果があがりました。では、この遺跡は弥生都市なののでしょうか？一方、池上遺跡や前号掲載の下植野南遺跡では方形周溝墓の埋葬施設が検出され、墓域の実態も徐々に判明してきています。邪馬台国論・弥生都市論などのセンセーショナルな議論とは別個に、弥生時代集落を古代村落論との関わりで捉える視野も必要な時期にきていると思います。

(編集担当=河野一隆)

## 京都府埋蔵文化財情報 第72号

平成11年6月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961 (代)



**KYOTO**  
**ARCHAEOLOGY CENTER**